

も構は無いではありませんか、彼公は彼公で、其乾兒子方が大勢あつて、自から其操縦をなさるで御座りま
すもの、成功するも失敗するも、更に閣下の關せざる所で、詰り此目録から見れば、素よりして赤の他人、
秦人の楚人に於けるに同じ理合、幸は唯々閣下の御功名さへ顯はるれば、其れて満足、畢竟個様に運動いた
しまするも、全くは閣下御一人の爲にする心底で御座りまする……(嗚呼忠臣なる哉)

斯くて目録は、某殿の御機嫌よきに乘じて、頻りに何事やらん密々に申し上げたり、その仔細は何とも知ら
ねども、初めは請願の如く、中は議論の如く、次は相談の如くして、終りに承知の如くにして、要領を得た
りけるか、某殿は手簡を書いて、目録に渡されたれば、密談は其れにて畢りたり。

* * * * *

場所は變つて三十間堀屏風屋の樓上、數名の白拍子を左右に侍らせ、大胡座の大酒宴、表面は豪華を示せど
も、其内心は去年の株式下落より、上げも下げも成らざる苦痛、何がさて、権利株ばかりでも背負て立たれ
ぬ程に引受け、銀行に入れたる抵當の諸株は、皆盡く價格の低落に、頭金の催促矢の如く、其上に乗替乗替

と先に廻したる買玉は、追式々々と攻め立てられて、算段の途に竭き、今は必死の場合とは、飲めども酔は
ず、歌へども面白からず、塞の虫や赤蛙、口を開きて時々嘆息するにぞ現はれたる。

『どうだ槍栗君、大きに遅くなつて御待ち兼ね……』と云ひつゝ入り來れるは、待ちに待たれたる目録幸な
り。槍栗虻内はそれと見るより『ヤア目録君、御苦勞さまで御座りました、サア一杯……時に例の話はどう
云ふお抽籤でげエしたな』と盃を俯めつゝ訊ねたるは、餘程氣掛かりの事情ある故なるべし。目録は白拍子
(その實は泥拍子)等を退座させて、槍栗に向ひ『中々困難だが、併し例の政黨運動を「かせ」に掛けて、段
々と説き付け、先この通り彼奴に直書を一通書かせて來た(と皮靴の内より、悪筆で上書したる一封の書翰
を出して見せて)この通りの宛名で、趣意は、目録の依頼は何分にも無理でも余に面じて聽いてくれいと云
ふ意味だに由つて、阿漕銀行の頭取だつて、彼奴の手紙じやア否とは言へないワ、そこで不足の抵當承知て
あの慾張銀行の口を入れ替へにして、一寸二萬ばかりの浮金を出して、今月の請け渡しを凌ぐ積りよ、さう
成りやア君の方だつて、自然と寛んで來るから、都合が附くやうに成るだらう……さうサ其間金は、君が出
すのが當然さ、頭を下て頼んだり、損を仕たりして間尺に合ふものか、それから例の第一回拂込一條は、ま

づ當分の願書の認可は、下らぬ事に頼んで置いたよ、此最中に認可されちや堪まらないからネ、併し創立認可が遅くなります様にと、内願するとは、可笑な世の中じやア無いか……時に君、あの、この助を招んで愛するのは、止してくれ玉へ、此新橋には鼻を突くほど多い女、あの妓より美のは箒で掃ほどあるよ……ナニサ實は彼、この助は、當時禁裏に成つて居るから、狼に指を丹鼎に染むるべからずよ……ハテ君は、木挽町の空屋の事を知らないのか、實に迂遠極まるネ……それじやア貴顯權官の間に立つて、巧に伎倆を揮ふ事は出来ないぜ、扱々困つた人物だなア……

(十) 孰が失敗たか

満月の女將軍は、小さき銀竿を三指に摘み、肩に八字をよせながら、大丸髻の下を掻きつゝ、「エ、旦那、わざと御立寄りを願ひましたのは、外ではありませんが、轉助の屏風屋の事が、とうとう麻布の殿様(骨拔が事)に知れて、一昨日の晩から泣くやら怒るやらで、大騒動が持ち上がりましてネ……」と語り出だすを半聞いて、目録辛は打ち驚きて「ナニ屏風屋の一件が、骨拔君の耳に入つたと、そりやア大變だ、其れだか

ら此間も余が槍栗に、あの轉助は大した理由があるに依て、絶交に仕たまへと、忠告を仕たに、槍栗が詰らなく未練があつて、聽入れれエもんだから、露顯に及んだのだらうテ女「ナニそればかりじやア有りませんと、ナンノ轉助が屏風屋で槍栗君を御客に取つて居る事は、私も疾うから知つて居ますし、其上に槍栗君だつて尊公と御一所で此方へも時たま入らつしやいますもの、そこは及ばずながら私も宜様に綾なして伏せて置きました、全林あの轉助、年は若いけれど、中々の達者ものでよく稼ぎますから、是まで骨拔君を其れて失敗た事が度々あつたそうてエすが、併し今度は失敗かたが烈しいやうですから、殊に寄つたら尊公のお手をお借り申して、誤つてもらひ度う御座います……目「そりや大承知だ、余で済むなら、いつても口を利うが、ナンノ用が済んだ後ではどうでも構はないけれど、今の所では此方に取ちやア大事の骨拔だから、余が立合つて、きつと槍栗に手を切らすると仕やうよ女「そりやア可けませんよ、槍栗君が止と仰しやつても、轉助の方で止させませんよ目「ナニ轉助の方で止さないよ、テモ痴、轉助はどうしても骨拔に誤まらねばならぬ場合じやア無いか女「アレサ、尊公さう火移が悪くツちやア困りますれエ、轉助が直素直に誤る位なら、何も尊公のお力を借らなくつて済みますけれど、中々轉助の勢が強いから、骨拔君に誤つ

て貰はにやア、甘く原々には成りませんので、困つて居りますのサ目「サア話が分らなく成つて来た、一休事の起りは、轉助が屏風屋で槍栗に出て居る事が骨拔に知れて、一昨日の晩、此家で骨拔が怒つて、轉助が失敗たのだらう女「そうで御座います目「そこで轉助が獨で誤つた位では、骨拔が承知せぬに由つて、余の手を借りて、卿が其詭言を仕て遣り度いと云ふのだらうが女「サア其が丸て違つて居ますよ目「フウウどう違つて居るのだ女「轉助が誤まるのじやア有りません、轉助に骨拔君を誤らせなけりやア可けないのでエすよ……エ、尊公も分りませんねエ目「余よりも卿の方が分らないぜ、失敗させたお客の方から誤まる奴が、何の國にあるものか女「所が此新橋にはあるから不思議じやア有りませんか……マア旦那、お聞きなさいましよ、あの轉助が骨拔君に御目に掛かつたのは、其初が烏森の佐川で、私家では關係の無い事てエすよ、それから先達て尊公が、骨拔君と甘利君とを、私の所でお招きに成つた時に、私が轉助に、卿は彼の骨拔の殿様と是々だと聞いて知つて居るから、宜だらうネと、念を押した所が、轉助が顔を曲めて、女將彼人はモウ御免を蒙り度いよと謝絶かゝつたに由つて、私が、卿そりやア宜ない、私が目録の旦那へ對して濟ぬからと段々と利解を云ひ聞かせて、其れから引續いて骨拔君も此方へ入らつしやつて、轉助を御品負に成さるの

て御座いませう目「そりやア其通りさ、じやに由つて轉助が骨拔を失敗ては成らぬ理ては無いか女「旦那、まだ其んな事を言つて、分ら無いねエ……骨拔君は殿様でも官員さんでも、大節儉の大郎者、その齋と來ちやア零錢欠通出す質ぢやア有りませんから、轉助がいくら勉めても常式の御祝儀一圓の叩ツ放さ、それだもの、轉助だつて實は鼻を摘んで居ますのは、尤て御座いませう、其れと違つて、槍栗君は言ふ事が皮肉で、男が悪くつて、お負に少々口息が臭くつて、其上に腋臭が烈くつても、ソリヤ金遣が奇麗て、轉助が勉めりやア勉めただけの事を仕て、相應に爲に成つて下さるから、轉助の爲にやア大事なお客……處で轉助が、骨拔君に當ツこすり半分に、ヤレ此指輪も、此間屏風屋のお客に尾張町の天賞堂で買つて貰ひました、此着替も竺仙に誂へて拵へて貰ひました、ホンニ感心に氣のつく御客の事よと、諷刺を云つた所から、其お客は誰だと聞かれて、ハイ紳士さんの槍栗君でエすよと素破抜たのが事の起りて、其れから返るの返さぬのと粉擾だして、汝見た様な素版婢はモウ呼ばぬと云へば、貴公見た様な官員にやア呼ばれても出ないよと、口返答……詰りが轉助は是を機に骨拔君を止つもの内心だけれど、骨拔君の方には、まだ十分未練が残つて居ると云ふ鹽梅でエすのサ……私の方はどうでも宜うござりますが、尊公から當分は骨拔を大事に扱つ

てくれいと兼々のお頼ゆゑ、コウ氣を採むので御座いますよ……左様サ、尊公から、よく轉助にお頼みなすつて、いやでも骨拔君に一寸託言の眞似をさせるのがよろしう御座いませう……目ム、宜々、それでは轉助を直に呼びに遣つてくれい、それにしても骨拔と槍栗の鞘常には驚いた、實に不思議な世の中だなア』と流石の目鯨も呆れ果て、明いたる口も暫しは塞がらざりけり。

(十一) 曖昧謝罪狀

斯くの如く骨拔局長の御心を憐まし奉り、斯の如く目鯨大策士の助勢を要し參らせ、斯くの如く満月女將軍の配慮を煩したる新橋の白泥拍子ころ助とは、抑々如何なる佳人ぞ、假令傾國絶世の美人と稱するに至らざる迄も、當世向の、色白丸肥にて、姿態妖艶、自から男子を憐殺する程の容色は備へたらんと、我も人も想像したるならんが、今や目鯨が招きに依つて此處に來り『今日は有りがたう、オヤ且那先日、女將軍昨晚はと……』と挨拶したるを見れば、扱も愕いたり、コハ如何に、是れが目下の一大問題たる轉助校書殿か、若しや人違では無いかと、知らざる人が膽を潰さんは決して無理にあらず。請ふ試に此轉助の讀者に紹介せん。

彼が年齢は本年正しく十九歳の芳紀、明治十二年二月七日愛知縣名古屋市出生なりとは名乗れども、京橋區役所の寄留戸籍に就いて調査すれば、明治九年に知多郡龜崎在の出生にて、かうきやアもんの正銘本場、年甫て十歳と云しとき、名古屋に來りて子守奉公、十三で魚の店の年期下女、十六で三州豊橋に轉じて旅宿屋奉公、十八の暮に東京に轉じて某屋の箱屋、色が黒くて鼻が低くて、三十六相揃つたる不出來の女、何一ツ採所の無い女なれど、臍が思ひ切つて下つた所と、名古屋甚九を一寸をかしく唄ふ所が、主婦の目に止まつたか、一昨年六月、單衣で此新橋に弘めを仕たりけるが、主婦の眼力あつばれにて、十時過から小待合の獨座敷でかづぐ賢れて、一週間お茶の禮通しても無いとは、天公の配劑、亦妙なる哉、但し某雜誌の審美批評家は此ころ助を評して曰く『昔し唐の白樂天は楊貴妃を見て、沈魚落雁閉花羞月と譽たり、いま日本の美術家は轉助を眺めて、金魚澤庵文庫白尻と賛すべし、何となれば渠が面付は丸ツ子の金魚の如く、渠が軀幹は澤庵漬の樽に似たり、其姿は文庫を背負つたる家鴨、その尻は大道白に勝れるを以てなり』と、此評言にて轉助が容貌姿色を察するに餘りあるべし。然るに此轉助の中々の見脈にて、大きな口を開き、反齒の間に泡を吹かせて、骨拔の鄙吝を罵り、お詫は扱置き『もうかう成つたら二度と再び骨拔君の面を見るも否きやア

もん、仲直の話はおきやアつせ」と遠慮も無く、名古屋方言にて言張つて、聴入るべき景色も無し。目録い
 まは口先ばかりでは押付ずと覺り、夾紙より五圓札一枚を出して『コリヤア轉ちゃん、御祝儀だ、そこで卿
 の言ふ所は皆尤だが、マア余に免じて今度の所は勘辨してやんなせエ。』と説きたれば、此轉助も賢節議
 員に劣らぬ人物なれば流行には些とも後れず、一禮述べながら其札を手早く帯の間にに入れて、速かに納得し
 て『それじゃ直に女將軍あてに、手紙を書いて上げませうが、其手紙の趣意は「私は骨抜君に對して、機嫌を
 損ねた様な事を云つた覚えは無いが、もしも私が座興で言つた詞の中に、骨抜君のお氣に障つた事があつた
 なら、お氣の毒で御座います」と云ふだけで宜敷ば書きませう……まさか、あんな屁鋒官員に、誤りました、
 御免なさいよとは、へい私にやア書けません』との挨拶。女將軍は『それじゃア曖昧で、能手紙の詮が無い
 よ』と硬派の説を吐たれど、目録は『イヤ、それ十分だから、女將軍、はやく轉ちゃんに其通りの手
 紙を書いて貰ふとするが宜せ、そんな鹽梅で胡麻化して済ませるのは、此節はやる外交手段、立派に例のあ
 る事で、骨抜君だつて、此間も其手で済ませる方には片口ぐらゐ乗つたらうから、何も案じはあるまい』と
 轉助に對つては、目録頗る對外軟の當世主義、成るほど時勢につれて行く事と知られたり。

然れども、骨抜は此曖昧挨拶の手紙を見たればとて、是では趣意が更に分りませぬだの、其の手紙を寫させ
 て下されいだのと云ふ様な野暮は決して宜はず、了得に官途の物慣れたる圓滑挨拶の氣風とて、直に融通を
 心に付けて、揚々然として大得意になり『ナニ女將、乃公が別に憤たと云ふ譯じゃア無いよ、あの轉助が
 酒の上で、餘り饒舌過るに由つて、將來を誠むる爲に、聊か懲戒を試みただけの事じゃ、轉が是に懲たと云ふ
 なら、其れで目的を達した理だから、直に呼びに遣つてくれんか、あゝ見えても轉は中々可憐兒だよ、一種
 言ふ可からざる底に頗る妙味ありじやワハ、……ア、昨夜から今朝に掛けて大臣公の官邸へ詰通して草
 臥た、轉を相手に一酌して浩然の氣でも養はねば、性も根も盡果る哩……併し轉助譴責の事を目録は知るま
 いな……ム、宜しい、目録に話しちやア可んぞ、世の人口が煩さいに由つてなア……』

(十二) 石無負高

曖昧謝罪狀にて、骨抜の方はまづ納まりが附いたれど、更に一場の紛議を醸し、某殿を初として、部下の策
 士の内幕までをも、紊亂せしめんと迄に及びたるは目録が懸引の機關なり。此は前回に説きたる木挽町より

西へ橋を渡り、銀座の大通を横切りて、南に入つたる日吉町の角で、白木とか呼ばせる待合の奥座敷、その客の一人は大島紬の羽織と云ふ装束にて、一見田舎紳士の如くには見ゆれども、どこやらに官員風の現はるゝは、近隣の知事公かと思はるゝ人躰、また其一人は容貌乙に氣取りて、我こそは當今の政治家と云はぬばかりの面付して、物躰を見せる氣取りかたは、某黨に名籍を列れたる議員殿かと思はれたり、他の一人は例の目繪辛にて、三人がコソコソ密話、その語中にて一人は石無負高、一人は赤井穴唐と云へる姓名とは知られたり。

目繪は石無に對ひて『時に先生、この度の忍びの御出京、御苦勞千萬、實に大臣公も先生の御盡力で無けりやア、是ばかりは甘く往くまいとあつての御呼び上げ、お陸で彼の連中が七八人と云ふものは、忽ち御味方に旗色を翻へしたのだから妙だ……』と讚賞すれば、赤井も傍よりして『そりやア君、何だつて石無先生の古顔だから、彼奴も陸では生利な口を叩くものゝ、面と向ツちやア一言なもさ、夫れに先生が堂々と利害を説いて、其方向を變換せしむる伎倆は、不思議に感化力を持つて御座るから、彼奴等も成程と感服するのであります……』と雷同して譽そやすにぞ、石無は大得意になつて『ナニ今度の歸順は敢て僕の力と云ふ計り

で無い、全くは目繪君の盡力で、軍用金が差支なく、右から左と出て来て、現金の買収直取引が甘いに由つてなりサ、此四五日間、僕も密かに溜池を初めとして、或は芝の公園、または木挽町のあせ川、烏森の糟駄屋と、鹿が谷の支店を廻つたが、どこに往つても、目繪君の敏捷と英斷とには、感心して居るよ、のウ赤井君、そうじやア無いか、赤」大きに左様サ、了得に鷹巢木華兩公の蕭何孔明だけあつて、目繪君の敏腕には驚き入る、現に聞多風之助が買込まれて居たとは、一昨日まで僕も知りませんでした目」イヤそれは矢張り石無先生の力與かつて助けありと、時に先生、今朝御旅宿へ、鷹巢公の内意で僕が使を差上げた時に、そんなお方は御居てゝ無いと可笑な返事をして使ひをお返しに成つたので、鷹巢公も頗る化現な顔付をされまじだぜ、お忍びは勿論合點だが、我々同志の往復には、どうか使法を設けてお置きなさらねば可けません子石」御尤々々、實は僕が出京して居ると聞いて、種々な人物が定宿へ尋ねて来るには甚だ辟易じやて、既に今朝も例の窮黨の鼠輩が、僕に勤告するとか、議論を仕掛るとか云ふ了簡で、何所をどう聞いて聞き出したか、三人揃つて、朝ツばらから宿所へ押寄せて、僕に面會しやうと申し込んだワ、所が旅宿でも兼々承知だから、帳場の番頭が澄した顔で、へイ石無さん、そんなお方はお居ては御座いませんと、門前拂ひをきめ込

んだので、鼠輩は嗚々と云つて居る、其の中に君の所の書生が、状箱を持つて来て、オイ此手紙を石無君に上げてくれい、大切の急の用だと、大聲で取次を申入れる、僕は唐紙の破からは是を覗見して、コリヤ困つた僕が居ると云つては悪いがと思つて、内心尤もアク／＼然て居たに、番頭も騎虎の勢ひで、君の書生へも、ハイ石無君は當方へお止宿では御座いませんと断ると、君の所の書生が首を傾けて、デモ昨夜も余は使ひに來たのにと素破ぬいて破綻將に綻びんとする状況は、所謂一髮萬鈞の場合だつたぜ、幸に番頭の強硬で、たて切たが、以來は使にもよく含ませて置いてくれ玉へ目ハ、ア、ア、そりやア御苦みであつたらう、それじやア以來は何とか變名を設けて置かうでは無いか、石無負高の替唄て意地無弱多としてはどうだらう、右「なんぼ變名でも意地無弱多は氣が利かない姓名だなア赤」ナゼ意地無弱多は片氣地で無いから、正義の存する所を識て、翻然と改悛し、加ふるに他人をも説いて御味方に加はらせ、内閣へ奉公の忠を盡すと云ふ意味だから、至極適當の變名でありますぜ、そこで意地無先生、肝腎な内情を目録君に聞いて見ると仕ませうではありませんか石「大きに左様、所で目録君、別の事でも無いが、赤西各太衛が兼ねて主唱して居る環市電鐵の事を、君は慥に受け合つたと云ふが、夫れに違ひは無いか、かの赤西が油斷のならぬ事は、君も僕

の注意で知つてのはず、其上に環市電鐵は現に目下内閣でも評議のある最中で、某大臣の如きは、随分異論のある事で無いか、それを君が獨斷で承知したと云ふので、御味方黨中大に物議ありて、赤井君も困つて居るが、其仔細はどうだ、聞かせ玉へ」と詰寄せたり。

(十三) 餌か函か

目録から／＼と打笑ひて「是は仕たり、兩公の鋭敏にも似合はざる御不審。その周章かたは頗る以て笑止てあります子、マア事の仔細をお聞なさい、振攝だ所がかうじや、東京市中をぐるリツと廻して電氣鐵道、所謂自動電鐵を敷き、市中の重立たる往來へ縦横十文字蜘蛛手かく細に鐵軌を引張りちらして、其利益をば一會社に専有し度と云ふのは、敢て今日に始まつた發企ては無い、一昨年頃から、方々の慾張連中が思ひ／＼の出願で、しかも相應に利目々々へ手を廻して居たけれど、當局だつて是程の大事業を、オイソレと容易に許可する譯に往かぬ事は、知れ切つた事實サ、處を彼の赤西各太衛が、去年の秋頃から僕に向つて「君この願の許可を周旋してくれ玉はぬか、某殿が奮發し御同意とあらば、閉議もどうか其に成るであらう、愈々成就す

る日には、東京市の内外すべて此會社の獨り占て、其利益が夥しい高に成るは必定じゃア、其時には一株五十圓で、二十五圓拂込の株が、忽ち五十圓、百圓、二百圓までに騰貴するは何でも無い事、君の方へ總括て二千株を分て上げて、其外に功勞株として、五百株は無代價で贈るに由つて、盡力してくれ玉へ」と折入つての依頼。實は僕も如是旨い事は無いと思つたから、去年の冬、聊か試た所が、中々さう甘くは行へさうで無いと覺つたに由て、まづ其儘で寐入つて居たのじゃ、然るに今度御味方説得の一條からして、彼の赤西も去者ゆゑ、直に此電鐵にからんで来て「愈々内閣が此電鐵設置願を僕の連中に許して、獨占をさせて下さるなら、眞先に御味方を仕らうが、其が許可に成らぬとあらば、僕も其了見ありて、思ふだけの反對運動を黨中に主張して、土俵に於て伎倆を示す覺悟だ」と退引させぬ釘鏝、痛けりや放せと云ふ威迫政略。此方の慣手を彼奴にやられて、僕と雖も當惑したじゃ。併し「其は不可、迎も出来ない相談だ」と一言で拒絶した日には、彼奴の事だから、己れ一人ばかりで無く、折角味方に附た輩までも、再び變心させて、此方の計畫を水泡に歸せしむるに遣はあるまい。さうあつては、實に此方は大變。その上に彼赤西、一筋繩ではゆかぬ人物、殊に寄つたら、環市電鐵を旨く自分の方に取た上では、又再び反覆かへつて、反旗を翻す心底かも知れぬとは、推量ばかりか立聞まで。良々彼奴が其謀略ならば、此方は其に欺された振をして欺すが名策と考へたに由つて、僕は「赤西君、宜しい、其電鐵、僕が内閣を説て、是非とも同意させて、君一手に許可に成る様に盡力する、急度印判突て請合た、其代に君は議場に於て、必らず御味方へ忠節を盡すか」と立派に請合つて念を押し、まづ彼奴が動かぬだけには仕て置た。彼奴は御味方を餌にして、電鐵の認可を釣らうと考へて居るから、此方も亦、其電鐵を囀鳥にして彼奴を引込む手段……ナンノ彼奴ぐらゐに胡麻化されて尺に合ふものか……決して御案はありませんに由つて、赤井君もその積で、黨中が騒ぎ立たぬ様に鎮めてくれ玉へ」と始終を語りたりければ、赤井も石無も安心して「赤」扱はさう云ふ魂膽があつての故か、それですっかりと分りました、併し、甘利篤川は其事を心得て居りまするか。目「否々、甘利には決して、この魂膽を話さないから、君も彼奴には言はぬ方が宜いよ。石」さうだ、彼甘利は才子だけに、口が早いから、知らせぬに若は無しだ……だが目録君、その電鐵は至極面白いぜ、此内閣危急存亡の秋に乗じて、一大問題を起させ、其同意と此電鐵とを、交換にして、此方へ占込ではどうだらう、中々の大利益だぜ。目「勿論、僕も内々其目算ありだ。併し赤西ごとき奴に占させては、更に面白く無いから、占むる位なら、此方で占め

知れぬとは、推量ばかりか立聞まで。良々彼奴が其謀略ならば、此方は其に欺された振をして欺すが名策と考へたに由つて、僕は「赤西君、宜しい、其電鐵、僕が内閣を説て、是非とも同意させて、君一手に許可に成る様に盡力する、急度印判突て請合た、其代に君は議場に於て、必らず御味方へ忠節を盡すか」と立派に請合つて念を押し、まづ彼奴が動かぬだけには仕て置た。彼奴は御味方を餌にして、電鐵の認可を釣らうと考へて居るから、此方も亦、其電鐵を囀鳥にして彼奴を引込む手段……ナンノ彼奴ぐらゐに胡麻化されて尺に合ふものか……決して御案はありませんに由つて、赤井君もその積で、黨中が騒ぎ立たぬ様に鎮めてくれ玉へ」と始終を語りたりければ、赤井も石無も安心して「赤」扱はさう云ふ魂膽があつての故か、それですっかりと分りました、併し、甘利篤川は其事を心得て居りまするか。目「否々、甘利には決して、この魂膽を話さないから、君も彼奴には言はぬ方が宜いよ。石」さうだ、彼甘利は才子だけに、口が早いから、知らせぬに若は無しだ……だが目録君、その電鐵は至極面白いぜ、此内閣危急存亡の秋に乗じて、一大問題を起させ、其同意と此電鐵とを、交換にして、此方へ占込ではどうだらう、中々の大利益だぜ。目「勿論、僕も内々其目算ありだ。併し赤西ごとき奴に占させては、更に面白く無いから、占むる位なら、此方で占め

なけりやア、妙がありませんよ 石「然り、然り、實に然りだ、其時には、僕は云ふ迄も無く發企同盟だぜ、赤「僕も其通りで、發企人に加へて貰はねば成りませぬ……」と其時は斯々せん、云々せん、忽に話頭は杖葉に轉じて、否々、寧ろ根本に復りて、濡手で粟の慾ばり相談。この時白木の女將は、襖の外でエヘン〜と咳拂して入來り『モツ旦那、こも太郎とてれ八が、先きから來て居ますよ、それにおやすは穴屋に出て居りますが直と貰つて來ますと箱屋が言て參りました、お話が濟ましたら……』 石「さうだ〜、玉を附て待せて置のは、天下の費だ 赤「直と此へよこすが宜しい 目「次手に酒も 女「その次手に機械は 石「ハ、ハ、ハ今夜は急ぎだから、其方は止にして色氣一方と仕やう、のウ赤井君、君は其が得意だから 赤「その事に限る、春宵一刻直千金、等閑に過へからずじや、ワハ、ハ、ハ…… 嗚呼此輩の相談と云ひ品行と云ひ、淺ましきの限かな。

(十四) 信友懇親會

却説槍栗蛇内は、目録のお蔭にて、聊か金融が出來て、先月の株式請渡は、どうやら斯やら、曲り形に濟ま

せたが、濟まされぬは諸鐵道會社株金拂込の切迫、原來この蛇内先生、這出政治家の癖に、内心は純粹なる拜金宗徒で、一攫千金の本願に、寢食を廢する程の慾張なれば、一昨年からして、鐵道の發企に全身の精神を注ぎ、東西に南北に奔走して、其創立を思立ち、偶々他人が計畫する所あれば、無理にも割込で發企人に加入連名して、手の届くだけ權利株を引ずり込み、一回の申込が五圓に成る、七圓になる、第一回と第二回で二十五圓の拂込で、五十圓、七十圓に成る、さうなれば、是々を合せて總計余の利益が、三十八萬七千二百五十六圓と三十九萬六厘七毛〇三と成つて、大豪富の大長者とは、實に旨いなくと、夢で拾つた財産の勘定をする様に、帳簿を披たり算盤を弾たりして、恐悦尤も極まつたる所が、思ひ掛けなき去年十月頃より金融恐慌、サア融通はげつたりと止る、相場はぢり〜と下落して來る、銀行からは急き立つて來るので利益の三十八萬圓は元が夢なれば、醒て跡なきは勿論の事ながら、本來なけ無し的身代、爪に火を點して永年溜めたる少々許りの資金は皆消飛で、殘る所は借財ばかり、其れに諸所の鐵道株を引受け〜取り込んだ高は、已に咽につかへて、吐き出す事も出來れば、呑み込むことは、猶更以て成り難く、びつたり詰つた脂烟管、雁首傾げて思案をしても、にツちもさツちも工夫は届かず、呆れ返つてべつたり尻餅を搗たる儘で起

き上がる事も六づかしき状態なれば、名詮自稱の槍栗蛇内、いまは尻餅楯内と改名すべき景色なり。此槍栗蛇内は、私に改名して尻餅楯内は、音便ぐらりの持説なして、議場に於ては常に順慶流を極めて、旗色の好い方に附かうと云ふ内股膏藥なれば、表面は中立派に屬すと云ひてう、其中立派で少しく氣概ある人々は、初めより鼻を摘まんで相手にはせぬねぶ一のけ物にてぞありける。されども議院黨派の内情に迂き松殿は斯とも知らず、蛇内が口先の巧みなるに迷はせ玉ひて、このウ目鯨、蛇内が申す詞の通りに往かなくとも、話半分と仕た所で、彼れに働かせたら、中立派の十五人や十人は味方に取れるであらう程に、貴公、彼と申し談じて、例の手段で計つたが宜からう』との御諭宣。目鯨は道に世間を知つて居るだけ、評判の悪い蛇内では、逆も其策旨くは行はれまいとは、内心に覺つたれど、目鯨とても、此年ごろ、鐵道運動では蛇内と手を取合つたる交際、株の賣買相場の懸引、種々の引掛かりで、今では切るに切られぬ中、蛇内が倒れては、余に取つても容易ならざる關係を及ぼすなれば、此は一番蛇内を立者にして、一手柄させて、松殿と蛇内の間を繋がる可からずと、自分勝手の理屈を附けて、頻りに計つて其手筈に及び、今夜は愈々蛇内が主人となり、信友ばかり招いて、水入らずの懇親會と名を附けて、烏森の精駄屋で中立派の連中を招待し、目鯨も信

友と云ふ廉で、同じく其席に列なり、其機會を見たらば、黄金湯の妙藥で、成らば直段廉く買收うと云ふ心算を胸中に貯へ、時刻遅しと待受けて、精駄屋へこそは赴きたれ。平生の酒宴は、椀焼の二品、ザツと驕つて刺身が附くと極つたる節儉の蛇内も、今夜は他に入費の出し手がある、余が懐の痛まぬ馳走だ、如是ときに思ふさま驕つてやれと、ぐツと威張を見せて、料理は扇芳亭へ申し付けて、一人前が二回づつ、羽盛の口取り、青籠の引物、折詰の引菓子、白金巾の風呂敷まで附けて置くと云ふ、正式の膳立、御取持の酌取には、泥拍子半玉で都合十人、いづれも當夜招待のお客がたに關係ある臭い校書ばかり、但し此席にこそ助を呼ばざるは、目鯨の注意と云ひ、且は骨抜への遠慮ありての事なるべし。午後六時頃より甲乙丙丁のお客がた、追々の御來臨に、一々の挨拶、浮世ばなし、世間沙汰、或は内閣の賢恩を評し、或は新柳の美醜を論じ、新聞の優劣、雑誌の可否、壯士演劇、女義大夫、およそ社會に出現せる森羅萬象、一ツとして談柄たらざるは無し、獻酬の禮畢りて御座附の奏樂始まり、戀の根笹のいせあま小舟の祝歌に引續きて、高談快笑にいとゞさゞめき渡つたるが、目鯨は獨り此席の模様いかにと眼を配つたりけり。

(十五) 無駄で無い

閑艶を眺めて傍に座し、迂筒を抜して色に酔ふ（開瓊筵以坐花飛羽觴而醉月）と唐人が歌ひたるも理や、堂々たる議員大人先生閣下たちも、新橋南北の尤物に詠詞を言はれ、秋波を送られては、鐵腸も鈍りて其柔かなる鈴の如く、玉骨もとけて其軟かなる莖蕪に似たり：『サアお客様のお好みだよ、成ちやんと太アちゃんと二人が、相方でお踊りな、いつもの通り旨く踊ッておくれよ』と老妓が指揮に兩名の羅妓は、扇を持つて座につけば、老妓は某々に上調子を弾かせて唄ひ出し、貴客の尊覽に呈し奉りたるは、當節流行の清元梅の春の作り替へ

○夢の春

此元密議大夫直傳

『慾にめぐる、あぶくて出来た手車の、漆の色もきのふけふ、心がらとて人さまに、云ふも愧かし丸じろし三田の松の門ぼんやりと、匂ふ臭味は淺間なる、烟りに似たるうそ手管、いやな買収かひ初に、あたふた

出づる策士たち、智恵を出してふ春げしき、浮いた仲間の一ニニウ三イ四、いつか彼方へつく羽根の、彼も是もと盲同士、いざ事間は日比谷さへ、萬づ善悪たわい無く、他から持込むせり買ひに、よい初夢を密議案、官員さんにとりたてと、鼻の思案のひとりぎめ、公使に知事や参事官、慾澤山といはふなる、たか（鷹）を頭に我爲の、賊漿づらで居並べば、ほんに田紳も抜目なく、走り廻りの使ひ役、續く車も賑うて「赤阪芝に牛込や、門の前後見廻して、そつと寄合ふ仲買は、安い高いの掛引や「意苦地ないのはなア、たれ赤毘に、氣がねして、逢くま川といを崎の、その金が愚痴言譯も、苦しい胸じや無いかいなア、情なや「収入案にはぼろを見せ、擴張案には尻穂を出す、首尾のまづさは各省の、豫算議す身も氣を揉みて、どうやらお茶を濁し川、盡せぬけがれ盲従と、笑ひ嘲ける銅臭は、幾世の春や匂ふらんく拍手の音バラくく。賞賛の聲ガヤくくの中に、客の甲は諸人に向ひて『コレサく、諸君、さう無暗に賞ては可んよ。今の文句を聞玉ふたか、憚りも無く我等議員の事を罵つた、失敬極まる語氣ばかりで實に憤慨に堪へられぬではありませんか』と發言すれば、乙は首諾いて『成程々々、あの替歌は此節頗る流行ので、僕も内心不平で御座るが、一鉢かの替歌は誰の作だへ』と問ひたるに、老妓は迷惑の顔付にて『サ

ア誰君がお作へなすつたか、存知ませんが、何でも斯ういふ替歌が出来て、大層はやるが、面白じやア無いかと云つて、私共へ教へて下すつたのは、某新聞屋の社長さんで御座いましたよ。乙馬鹿アいへ、新聞社の社長なんか、清元なんぞ知つてるものか。妓『それやア旦那、大違で御座いますよ、此節の新聞屋君は叩も歌へば三味線も弾けるし、堅い議論をなさる癖に、大意氣で、尊君の様なものじやアありません。丙』ハ、大しくじりだ、それやアどうても良として右様な歌が流行ては我々が當惑するぜ。蛇内『大きに左様さ、甚以て我々の面皮に關係するが、何と内務省へ談じ、警視廳に紹介して、禁止させる譯には參るまいか』と氣を揉み立つれば、丁は傍にて嘲り笑つて『ワハ、ハ、ハ、新聞紙の發行禁停さへ、全廢し様と云ふ意氣込で居るのに、清元替歌の禁止が出来るものか、宜いては無いか、當節買収が盛に行はれて居るに由つて、其實況を歌に作つて唄ひ、手を附けて踊るのは、何も不思議はありは仕ないよ、買収て源泉已に濁れりだもの、何ぞ其末流の汚たるを怪しまんやてあります。御主人の尻餅君、否々、槍栗君は頻りに此替歌を否がり玉ふが僕は少しも否がらぬネ、列座の諸君の中に買収されて居るお方は一人も無いと明白なれど、若萬一にも萬々一にも有るかも知れぬが、憚りながら斯く申す。襟本就太郎は高明正大青天白日で、買収されて居ないから、

大平氣で、此替歌をば甚だ面白いと思つて居るネ、若しまた此替歌を聞いて心に疚しい所があるから癪に障る方があるなら、それは身から出た錆で致し方ありません。』と大氣焔を吐いて一座を睥睨したりければ、戊巳庚辛壬癸、いづれも口を揃へて『襟本君の宣ふ通り、實に議員の身として、いやしき金錢に眼が眩み、然も零錢で買収さるゝなどは、イヤハヤ怪しからぬと』如是奴は風下にも置かれませぬ『議場の神聖を穢すとは、其輩の事て御座る。』と高聲に罵り散して意氣頗る盛なりけり。

是にて當夜の主人たる槍栗蛇内の尻餅内も、肝要の買収相談は噓にも出すと能はずして、折角の御馳走も喰はれ損と成つて、果はワヤノで退散に及びたり。其後で蛇内ほつと溜息を吐いて『エ、目録君、あの勢では逆も彼連中の買収相談は無駄で御座いますなア』と力を落したれば、目録は首を振つて『イヤ決して無駄で無いて、彼中にも、二三人は動かさせさうな奴がある、特にあの襟本は慥かに此方の者だぜ。ハア其れが見え無くては君も策士とは云へないぜ。』

(十六) 名畫の力

「へい殿様、酷いお寒さで御座います、此程から度々お窺ひ申し上げましたが、いつも御出勤さまの後で、お目通りを仕りませんで御座いましたが、今日はお希らしく御宅様で、直に拜謁仰せ付けられ、有がたう存じ上げます」と次の間の閑際に低頭平身して御機嫌を窺ひ奉つたるは、兼ねてお出入の骨董商、大神屋變兵衛、通稱を大變と呼べる有名のくはせもの、主人の目録は二枚瓊ねたる友禪の大座蒲團の上に、木魚然として座し、萌葱天鷲絨で張つたる脇息にもたれながら、打ち見やりて「オ、大變か、よく来たのウ、此間から詰らぬ事に掛かり合つて、晝夜の懸廻りて寸暇なしよ、折角大臣たちが手を下げての頼みを、木て鼻を括つた様に否だとも断られず、ア、是も浮世の煩て仕方が無いと引受けた所が、イヤモウ醋だの蕨蕪だのと、種々陸陀な事が、夫れから夫れへと沸いて来て、煩擾には辟易するよ、少々の金で済む事なら、浮世交際は止にして貰らひ度い(不平を假りて大得意を吐く所、意氣昂然たり)……今日は幸ひ珍らしく閑暇で夕方までは先づ用なしじや、マア話して居んか……何か變つた物は出ないかね、貴様は岩崎や安田の所へは、時時面

白い物を持つて往くさうだが、なぜ余の所へは持つて来ない。余だつて品が宜ければ随分言直で買ふぜ……ハ、ハ、ハ大變、さう真面に成らずとも宜しい、戯言だはハ、ハ、ハ」と笑はせ王へば、大變はやつと安心して「殿様、御戲言でも可けませんよ。外の者は存じませんが、此變兵衛に限つては、此方様が第一のお得意で、御譜代同様に心得て居ります私、そりやア佳いお品さへ出ますりやア、一番蒐に殿様の御覽に入れませんが、平常私の規則で御座います……テモ殿様實以て當節は御覽に入れ様と云ふお品が御座いません……まさか夜な／＼出る怪物を持参いたしても、どうして／＼殿様の御眼力が系らいに由つて、お叱を受けまする計りで御座いますから……」と且謝し且媚つゝ、仰せに従つて閑の中に這入り、床の間を見廻して「ア、佳いお花だ、雨雪點金の宣徳花瓶に、寒牡丹は恐れ入りました、此節東京の諸家様で、個様なお花を拜見致しまするのは、此方様ばかりで御座います……ハテ面白いお軸で御座います……」と小首を傾くれば、目録は微笑し笑ひながら「大變、貴様はその懸物を見知つてる筈だが大へい左様仰しやりますれば、見た事もある様で御座います目見なくツてサ、去年の秋、慾田の賣り立ての時に、甘炭が脊負込だ品だよ大へ成るほどあの應舉で御座いましたか、是がどうしてお邸様へ参りましたか、御買ひ上げに成りましたので御座い

ますか 目「馬鹿ア言ふな、名古屋仕入れの應擧で、出来の悪き加減が一ト通りで無い上に、マア見たがよい
 中が松の樹の下に恵比須が鯛を抱て居る圖で、左が高垣に山吹、右が樺ざくらに幔幕、こんな怪しからん圖
 が應擧にあるものか、誰が此様な賈物を買ふものか 大「左様とは存じましたが、お床に懸つて居りますから
 目「サア是に附いて不思議な事があるよ、實は去年の十一月ごろ廿炭が来て云ふには、例の應擧は全く私の
 鑑定違て飛んだ事を致しました、逆も私共の手では賣れませぬに由つて、恐れながら此方さまのお床に、賣め
 て十日ばかりもお掛け置きを願ひます、さうしたら、又此應擧に位が附いて、どうか縁剛が出来るかも知れ
 ませんに依つて、何分お願ひ申しますと、違つての頼み、それじゃア余が家の床の間に食客をさせて遣らう
 と、廿炭に掛けさせたのよ、所が不思議な事には、此臭い應擧を懸けた日より、思ひ掛けない話を持込まれ
 それが此目鯨の諸口に成つて大割好と云ふ譯よ、併し一月にこの掛物は困るからと、取つて見ると、其話が
 ばれに成り掛かる、そこで又掛けて見ると、其話が纏まつて、多ても無いが其度毎に二千や三千はきつと浮
 いて来るから妙じゃア無いか、夫れだから如是縁起の好い懸物を廿炭に返す事が出来なくなつて、何程かに
 買つて置かねば成らぬ仕宜に成つたのよ、エ、大變、縁起と云ふ事もあるものだなア、是が所謂名畫の力て

今じゃア此三幅は余の爲には三神の託宣で、毎朝お神酒を上げて拜まれば成らぬから妙だらう（是俗物の本
 性）大「へエ左様で御座いますか、それじゃア此のお幅が今では御當家様のお寶、ハテ不思議な御利益がある
 もので御座いますネ……時に殿様御多用の中で甚だ恐れ入りまするが、一寸古畫の御鑑定を願ひ上げたう御
 座いまするが……」と物體らしく風呂敷包より取り出だしたるは、二重箱入りの懸物一幅、目鯨は幅中の畫
 様を篤と見て『ム、無落款の古佛像、頭が三ツで體が一ツ、手が六本あつて種々な物を持つて居る……サウ
 三寶荒神だな……コリヤ慥に金岡だらう 大「恐れ入りました、此通り箱書付は常信で、古法眼の添狀では金
 岡とありまするが、此いらに成りましては逆も私共の目は届きませんに依つて…… 目「此金岡け、暗やみて
 見ても直に知れる……ムツ了得古法眼は眼識があるよ、是を金岡と極たは惑心だ』とおのれが鑑定のまぐ
 れ當りの大得意から、すツかりと自惚て、幅は勿論箱添狀ぐるみ一切喰はせ物とは目が届かず、嬉しい餘り
 に買氣に成つて『此幅の代價は……三百圓……そりや高い、二百五十圓にしろ……、買つて置かう……』と
 買入れたる一幅は、彼の人物に劣らぬまがひもの、

(十七) 態運の御使

既に夜に入りたりければ、兼ねての約束に従ひ「頼む」と一聲玄關に音信て來れるは、進歩塔の大衆の其中にて、さる者ありと聞えたる、尾先阿闍梨狐猫、大神坊猪禪師と云へる兩僧。これは此程まで一方の大將として世に振舞たりけるが、尻口にて物を言ひ、二足の草鞋を彼方此方に履て、世を欺き損ねて、天下の物笑ひ塔中の誹り、了得の面目なきに、暫し法師姿とは成つたれども、素より心中は尋常の俗人に勝つて、名利の欲に專一なる漢等なれば、今以て塔中第一の僉議者、無雙の大策士と呼ばれて、常は轉經座主態運大僧正の御傍に近う侍りて、山務の扱ひ宗派の懸引をぞ成したりける。

寒暄の挨拶談詞の交換ども事畢りて、談話は肝腎の問題に入りたれば、尾先狐猫は膝を進めて、主人の目録辛に向ひ「時に目録君、我輩この多忙の中を顧みず、特に貴君の貴重なる時間を妨げて、かく参上いたしたるは、別儀でもありません、貴君が御運動の議員買収一條の事で、篤と御見込をも窺ひ、且は關白松殿並に鷹巢殿木華殿の尊慮の底をも、篤と承知仕り度い、實は態運大僧正にも相談の上で、御面會を申し入れたる

儀であります」と此凛烈たる寒中にも拘らず、腰なる扇を取出だし笏に持直して、ずつと意氣込んだる所は、團十郎の實盛に彷彿たるが如し(團十郎これを聞かば、是は怪しからん、あれ等に似られて堪るものかと、不平を鳴らすべし、穴賢、團洲にな漏し玉ひそ)目録心中には、扱こそ難題ごさんなれと思ひたるが、左あらぬ體にて、「ハ、ア兩公の御尊來は其儀で御座るか、買収に付ては僕の方でも十分に利害得失を考へた上を取掛かつた仕事だが、まづ兩公の御高論を拜聴いたしませう」と答へたれば、大神坊は進み出でて、「サア其儀で御座るか、抑々去年現内閣組織の始めに當つて、松殿その外の諸公と僕輩の買首たる態運大僧正との意見相投したるに依つて、然らば進歩塔を擧げて御味方を致す御座らう、其れに付ては云々の條件は御承諾で御座るか、其條件は盡く承諾仕るに由つて、何分ともに御助勢を頼むとあつた。是で現内閣と我進歩塔と提携が出來て、一山の詮議事纏まり馳せ参つたる次第は、今更申さずとも御承知のもと、然るに現内閣が其以來の御處置と云ふものは、更に其條件を御採用に相成らぬので、僕輩は懃ひ其間には入つただけ、黨中の大衆に對して申譯の仕様も御座らぬ目」オットお詞の中だが、現内閣は其始からして、諸事万事一から十まで進歩黨の注文次第に成つて、お指揮を受けませうと、印紙を張つて約束を致されたではありますまい。シテ

見れば、さう尊公方より不足を言はれる所は無いと思ひますれエ尾ソリヤ御尤、何もきツと注文通りにすると云ふ法律上の約束は無いけれど、政治家に欠くべからざる徳義上の約束は、自から是を背く事が成らぬ様に成つて居る譯ではありませんか。併し其一段はマアどうしても宜しいとした所で、差當つたるは議員買収の一條、世間では驚々と論難して、現内閣は實に非立憲的の動作を以て、議院の神聖を穢して、敢て之を顧み無い、熊運大僧正も内閣に椅子を占め、進歩黨も提携して居りながら、此動作は何たる事である乎、怪しからぬ所爲では無い乎と、口を極めて罵り散らし、現に反對の新聞紙は、毎日々々此譏諷を以て紙上の過半を埋め、天然痘の流行では無いが、それが傳染して、頃日では我黨の機關新聞までが其事を悪口して居るのは、尊公も御承知でありませう。彼反對新聞が我々の秘密を評くも、尤も憎むべしだが、又平意虚心で考へて見れば、強ひて憎む事も出来ぬ、と云ふのは買収の事實は事實にして、蔽ふ可からずであるに由つてなりて御座ります。他の諸公はそれで差支は無いと仕ても、我熊運大僧正の身に取つては、實に迷惑極まる次第で、我々共も世間に對して、甚だ面目を失ふて居ります。犬然り、尾先阿闍梨の申す如く、僕輩十年の名譽は、今度と云ふ今度、全く地に墜て、三文の價も無い様に成つたのは、畢竟この買収の然らしむる所

ある。尤も買収も議院操縦の爲には必用の政略である事は僕輩も存知て居りますが、夫れならば、ナゼ前以て尊公より僕輩にお打合せ下すつて、世上にばつと仕ない様に巧くお行下さらぬか、熊運僧正へは一言の御相談も無く、わが進歩黨を出抜て、尊君方策士の手で、買収も買収大買収、新橋の待合、芝の公園、或は赤坂牛込麴町と、諸所に支店を開き、サアお來なさいと、大手を廣げて、がらくたを買収するとは、無遠慮究まる成されかた、外國へ對して日本内閣の外聞甚だ宜しからずではありませんか。此先の收局はどうなさる召か、松殿その外諸公の御賢慮が僕輩には一向に相分りませぬ、尊公で御辯明が出来ずば、僕輩これより直に諸公へ推参いたす心得で御座る、何とて御座るな』と詰寄せたり。

(十八) 這々の躰

目録は心中にて嘲笑ひ、稍々輕蔑したるが如き風體にて『イヤ兩君の御質問、よく相分りました、其れならば關白松殿、木華殿、鷹葉殿たちを煩す迄も無く、僕が詳細明瞭にお答を致して、熊運大僧正殿はじめ、御一黨の疑團を釋ませう。抑々議員買収の事は、内閣でも内々其氣があつたかは存せぬが、思切つて大袈裟に買

收を成されませいと勤めたは誰でも無い、斯く申す目録辛が去年の十二月上旬、内閣諸公へ切にお勧めいたし、責任を取つて買収したのであります……向も今更お驚きには及ばぬ、今日では公然たる秘密、隠立を仕した所で詮ない事、その上に敢て隠すにも及びませぬよ、どうで世間は金次第、人間萬事金世中でありませとの……サア其買収は、成るほど非立憲、卑劣、不徳義、没廉耻に相違ない、尊公方の講釋を聞かずとも、目録辛最初ツからよく存知て居りますよ、併し其れを存知て行なつたは、事實止を得ざる故の事……マア篤と考へて御覽なさい、今日我國に巍然たる大政黨と云ふのが存立して居りますが、君等の進歩黨でも、反對の自由黨でも、國民でも、ヤレ二大政黨とか、ヤレ三大政黨とか、大層に振込て意張て居ても、議院の多数を占て居る黨が、一ツでもありますか、せいゝ多くて三百頭顱の中で、百〇二三、乃至、零の八十ぐらゐが大多数ではありませんか……それ見玉へ、其黨一ツの勢力では、逆も議院の多数を得る事が出来ぬのは、最初ツから知れ切つたる事實でエせう。若しも君等の進歩黨が、百五十以上を衆議院に占て居るならば、現内閣は決して他黨に手は附けないネ、どこ迄も進歩黨に依頼して安心だけれど、ソリヤ實際出来ませぬ、シテ見れば失敬ながら、進歩黨は議院一少部を持つて居る小政黨さ、内閣では此小政黨ばかりでは、多数が得

られ無いに由つて、據所なく他の政黨を抱込で、雜煮の如く、薩摩汁の如く、ゴツた交にして、是非とも百五十以上の頭を、衆議院に揃へさせて味方にせれば成らぬと云ふ事が、實際問題であります……宜しいかサアさう成つて見ると、何な方略で味方に附ける乎と云ふ問題が初めて、浮いて來た、所でヤレ鐵道一件を承知して遣らうとか、官員にする約束を仕やうとか、雙方の間に種々薩埵な注文が出て來たに由つて、僕は内閣諸公を諷めて云く「それは全く不可なり、名器は決して人に假すべからず、閣下が既に進歩黨の連中に政務官の事を肯じたり、公使や知事に任ずるなどと、薄々の御承諾をなすつたのでさへ、僕は甚だ不感服であります、斯かる場合に於て、後の憂を遺さざるは、現金に限りませぬ、但々現金を以て議員を買収なさるべし、若し事機これを許すとあらば、進歩黨の方も、其薄々約束を斷然と破談に成さるが良しい、内閣と縁をお絶なさるが良しい、さうなれば僕の手で彼奴等の過半数以上は、キツと買収して御覽に入れます」と大聲出して申したに相違ありません……全體君等が、全數三分の一にも足りない小政黨でありながら、ヤレ政黨内閣で無ければ非立憲だの、何のかのと、理屈ばるのが、沙羅臭いと云ふものだ、どうで少数の日は、他人の指圖に従ふて、お餘りの旨い汁でも吸ふのが當然サ、其れが否なら、小さく堅まつて、寒の中の

千大根見た様に、乾すくばって居るのサ……勿論、藩閥内閣は知れ切つた事で無いか、或は長閥内閣、あるひは薩閥内閣、また或時は薩長聯立内閣と交代するもの、在體に云へばマア當分は君等の手には渡さぬ積りよ、其爲には、時と場合に由つては、腕力でも戦争でも、敢て恐れぬと云ふが、我輩の覺悟だもの。ナンノ議員買収で世間に彼是言はれるくらゐは、素より平氣の平左衛門尉蛙の面水サ。阿古屋の科白じや無いが「お前がたも精出してお買ひなさるが身のお勘」だ。其れを今更君等が彼是と理屈らしく云ふのが、實に可笑いて無いか……ナンノ君等だつて、耶穌や孔子の再來の様な事を言つて居ても、洗つて見たなら、純粹潔白な水晶でもあるまいよ、随分否な虫の糞珠、その内證の魂膽に、臭い物に蓋を仕て、世間に知らさぬ内幕は僕だつて知つて居るぜ……其上にまた彼連中は錢で買収た一時の事ゆゑ、後の腐は残らぬが、君等の獵官ばなしは、内閣に取つては餘程祟が恐ろしいと、僕は正直案じて居るネ……サア其事よ、君等の方でも、是々のわけだから金が慾しと、打附けてさう云へば、僕だつて苦勞人だ、其れに僕の懐が傷むと云ふでは無し、元來人の金だもの、相談づくでは巧く工夫して、廻して上げまいものでも無いが、乙ウ議論の脅迫では、僕は些とも恐れないよ……それが悔しくつて腹が立つなら、斷然内閣と分離し玉へ、内閣では少しも差支はあ

りませんよ、其時には僕が財布を首に懸けて、否さ、皮鞆を手に提げて、ズン／＼と君等の仲間を買収で廻るから……其積りでお居てなさるが宜しい、熊運大僧正も、そりやア疾に御承知の筈でありますぜ』と滔々と説出だされて見れば、其説大に眞理ありて、大神尾先は返すに詞なく、道々の體にて逃げ出したり。

(十九) 知事令夫人の候補

威儀堂々たる擬勢には、誰人と雖ども一瞥して豈長敬の心を發さざらんや。宜なる哉此先生、學問該博にして智略富瞻（其實は學問淺薄にして智略皆無なれども）黨中に在ては夙に總理の帷幕に參して、其腹心と頼まれ、議院に連なりては、既に黨派の領袖となりて、其操縱を掌どり、持説の圓轉たるは、瓢箪で抑へられたる鮎の如く、心術の糺糊たるは、葛藟に仕たる豆腐に異ならず、善く世と相忘る、何ぞ今日の議論は昨日の演説に撞着するを怪しまんや、巧に時と推移る、争てか現閣の施爲は蓋關の計盤を踏襲するを恥とせんや、已れ一身の爲には、國家の利害をも顧みざる、元來是個人主義の骨子なり、他の名利の爲には、天下の公議をも恐れざる、宛然眞に拜金宗門の秘訣たり、乃公の頭腦初よりして氷よりも冷かなり、何等の直言に

會ふも、惡ぞ此面を赤くすることあらん、夫子の骨隨今や棉よりも軟なり、幾許の刺戟を受くるとも決して我體を直くするをせざるなり、悟り來れば善惡不二、観じ去れば毀譽皆空、柳は緑花は紅、砂糖は甘く胡椒は辛し、何の人間五尺の軀、慾が無けりやア骸骨同様……と乙に覺つた變哲理學。抑々此人物を誰なりと思召す、是ぞ即ち進歩黨隨一の先生、茂林丹紀と呼做せる賢豪傑、小刀流の師範、兼内股巾着の本家なり。時已に午後十一時を過ぎたり、門外にて「お歸り」と報知て、車夫が引込む玄關前、茂林丹紀先生踏躑とし、て車を下り、車夫と書生に雙の靴を脱ぎせて、上りながら書生に向ひ「留守の内に誰か來たか」と問へば、書生は誑んで「ハイ先程、尾先君と犬神君がお出に成りまして、唯今日繪へ往つて來た戻路だが、お留守ならば、明朝お目に掛つて委しくお話を致さうと、仰せ置かれました」と答へたり。茂林は少し小首を傾けたけけるが「ム、其外には書」ハイ赤井穴唐君から車夫が御使に參つて、聞多君のお宅で今晚はお待申し上げますから、お出を願ひますとの口上て御座いました茂「何時頃だつたへ書」左様で御座います、六時半頃でエした。それから木挽町の満月から電話て、骨拔君が槍栗蛇内君と御一所で直に御出で下さいましたと申して參りました茂「好々、手紙は無かつたか書」ハイ赤西君から御使で御親展書と、其外に二通は郵便、ミン

な奥様のお手許へ上げて置きました茂「さうか……と聞き流して奥へ入つたりけり。茂林丹紀令夫人。遠くその素性を尋ね奉つれば、元は淺草龜岡町の生れ、十三で外妾、十五で雛妓、十六で藝者、牛込、赤坂、神明前、靈岸島と遍歴して、下谷に轉じ、一昨年廿八歳にて茂林令夫人。ヒステリーか梅毒か、但しは血の道か、孰れかは知らねども、いつも色青き瘦驅の半病人、いま一步を進めば地獄から火を取りに來さうな風體、箱火鉢の側に案火を拵へて寐て居たりけるが、茂林の歸りたるを見て起き上がり「良人大さうお歸りが遅いじやアありませんか、此節じやア毎晩々々十一時よりお早い事はありませんねエ、私しやアお午過ぎから頭痛が酷して、眩暈が起つて、胸先がざりざり指し込んで、腰がみりみりする様に痛んで、居て堪らんから、横に成つて落着いても、些とも寐やアしませんよ……そして今夜アどこでエした……嘘をお突きなさいました、石無君の旅宿の事がありますものか……へー石無君は木挽町のあせ川に泊つて、御座いますか……お隠しなさいますな、私やア家に居ても良人が今夜ア何所に往つて、どう云ふ素牌賤女を呼んでるか、皆知つて居ますよ……馬鹿々々しい、人にやア散々ばら家で苦勞させて、女狂も大鉢にお仕なさいな……へん議院の打合せも無いもんだ……」と嫉妬の怨言口を衝て出て、其勢當る可からず。茂林先生

或は慰め或は叱しても、恩威ニツながら行はれず、高利貸の分疏、借金の斷り、小遣錢の算段、家の暮の遣繰まで、疊を叩て一々と説出だし「サア貴君が立派な政治家さんなら、是々の口を奇麗に形付て、私に苦勞をさせない様にお仕なさい」と、詰掛けられては、了得の先生も一言の答辯なく、口を針で黙したるは、議院に於けるよりも面目なくぞ見えたりける。

然れども茂林先生は負ても失敗でも、先生は先生だけの伎倆あり、此猛り狂つたる令夫人の嫉妬を、どうやらからやら鎮撫して遂に最終の効果を収め、漸く平常に復して後は、今迄の風波はどこへやらで、夫婦差向ひの陸語「：良人が知事さんにお成りなさりやア、私やア本統の奥様でエすねエ、嬉しい事、本統で御座いますか：オヤ洋服束髪で花の附いた帽子を冠つて、それが官員さんの奥様の出の装束で、馬車に乗つて貴君と一所に御所へお禮に出るの：：へー天長節にやア、帝國ホテルに呼ばれて、踊を踊るの：：オヤ道成寺や關の戸じやア無いの、矢張カツポレだの甚九でエすか：：オヤ可笑い西洋のダンス：：そして貴君が知事さんに成るのは何時ごろ：：議會が済んでから：：またお約束が、間際に成つて、お断を喰やアしませんか：：間違の無い様に証文でも取つてお置なさいよ：：貴君が言憎けりやア、私が箱屋に成つて、大臣さん所へ往つて、念を突て來ますよ：：」と餘念なき心の中、をかしくも亦氣の毒なり。

(二十) 反色を示せ

此は赤阪溜池の邊なる怪し氣の待合、その二階座敷に秘密會合を催し、夕景より集つたるは、何れも黃白に眼くらみて、持説を賣つたる變節議員の某々等、都合其勢十一人、開田風之助を會長として、密々の内講に時を移したり。

開田風之助は、諸人の愚痴を打聽きて、喟然として嘆じて曰く、「諸君の迷懷、多少の道理あるに似たれども畢竟諸君が僕の忠告に従はずして、去年の暮に押詰つて、廉賣したのが、終身の誤と云ふものだ。彼時僕と赤井とが、諸君に向つて何と言つた「諸君も極めて苦しからうが、此暮の難關を我慢して過渡し玉へ、内閣の策士兼會計方の目録辛は、石無負高、骨抜軟良など、申し合せ、歳末金融の苦しい所を附込み、足許を見て直安に買収する所存だに由つて、此方も此關所を踏張て持堪へ、來春に成つた所で、徐々と相談に掛かれば、先方では益々時機切迫て、眼前に差支が見ゆるに由つて、随分相應の高直に買収のは必定である、其れ

を此暮に急いで賣れば、千圓の直打は二百圓か百圓に下つて、我々迄も自づから迷惑するから、辛抱し玉へ」と言つたてはありませんか。其忠告の信切を聞入れずに、各位が二百圓で宜しい、百五十圓に負ませうと、捨賣する様に賣つて畢つて、今更後悔しても詮術は無からうぜ」と己が前見に誇つて演たれば、甲乙諸人は頭を掻いて「甲」サア其時の御忠告が、僕等に解ら無いでもなかつたが、何を云ふにも、君、察してくれ玉へ第一、我輩が借りました金は公正證書で、執行が附いて居るのだらう、其れて郡檜藏を初めとして、氷菓子連中が、嚴酷究まつたる催促には、殆ど通るゝに途なしてありませう乙「其上に餅を搗に差支へるは、暫く忍ぶと仕た所で、妻は飢に泣き子は寒に叫ぶと云ふ境界丙「孔方兄は全く文を絶ち、窮鬼頻りに外より迫る所は、此世からして地獄の有様丁「およそ賣つて錢になる物は、何でも賣つて、焦眉の急を救はねば成らぬ場合、哀史のフアンチン女では無いが「黄金の色なす髪の毛まで是れ此通り切つて賣り、今は手段に盡き果て、情を人に賣りました哩なア」と云ふ仕宜だもの、僕輩も安直とは思つたけれど、據なく捨直で賣つて飢寒を凌だ理てあります」と口を揃へて辯解したるは、氣の毒なりける次第なり。聞田は打詰いて「そりやア如何にもさう有つたらうが、其窮迫は君等ばかりでは無い、僕と雖ども、槍栗、赤井、赤西の諸氏と雖

ども、同一の場合だ、其所を辛抱するのが眞の辛抱と云ふもの。併し實際其通りなら、猶幾分の憫諒すべき所もあるが、諸君の中には、其暮に獲たる金を將て、松の内の御約束費に充て、此赤坂や或は牛込下谷邊で豪華を示した連中もあるぞ……其れは君等が隠しても僕は實地を探偵して知つて居るよ、其上ならず議院休會中、彼所此所に會合しては、八八の戦争に連日連夜の激闘、實に渾身の精神を、此輪贏に委ねて居玉ふたて無いか……現に其座に列なつた某が、僕に告白したものの、證據判然埋滅するを許さずでありませう……いくら君等が雄辯で鷲を鷄と言黒め、議場に於ては物の見事に査定案を反古に成し、都て豫算は原案通りと、所謂一鴻千里の勢を以て通過せしむるの長廣舌ありと雖ども、此一儀に關ては、僕に向つて一言の辯解はあるまいがな……知つて居るよ……君等が五圓十圓と究て置いても、一組か二組の後には、相互に空券の取遣で、其證券は盡く不渡りゆゑ、遂に約束手形の融通停止と成つて、君等の弄牌場裏に一大恐慌を來した事まで知つて居るよ……知れ無くてサ、其事は公然たる秘密だもの……其ればかりで無い、新橋の南北は言ふに及ばず、下谷芳町日本橋、到る處で戦争を催し、即諾藝妓周旋女將を相手にして一圓二圓の顯微鏡、それも揚句の果は、そこに三本、彼所に五本、拾ひ集めて三百本と借に仕て置き、蝸の調練見た様に、何所も此も

足だらけとは、實に君等の器量が下るぞ。勿論々々、苟も隠微を許して瑕疵を覓めば、顔孟と雖ども、其私行に議すべきを免かれざらん、天下豈一人の完良を、見るを得んやとは、古人の明言、僕だつて、相應に瑕瑾のある事は、自から知つて居るけれど、君等のは餘り酷過るからよ』と十分の面折に及びたり。

餘りの荒涼とや思ひけん、座中の一人は憤然として聞田に對ひ『イヤ聞田風之助君、君の非難には尤もあれば、不尤も亦鮮なからずだ、議論をすれば言ふべき事が多少もあるが、君と議論は仕まいよ。併し今夕の會合は我輩前途の事に付、君と相談をする爲であらう、君も至極宜しいと言つて出席したのであらう、僕等は何も君に柳卸をされに態々此まで参りは致さぬ、前途の胸算が無い位なら口を針めて貰ひませう』と狂て掛ければ、聞田は諾いて『さう急込み給ふな、僕だつて諸君の爲に大に前途に謀る所があるに由つて、其前提に諫を陳述したのサ 甲『ム、シテ其謀る所と云ふのは 聞『外では無い、反旗を掲ぐる色を見するのだ乙『そんなら内閣に反對して聞』ジツ、是サ、聲が高い』と四方をきつと、見廻したり(此所見物は、「イヤ左圍次」と譽むる所なれども、場所が赤阪だけに、演伎座の壯士俳優で「ヤア聞田君まらいぞ」と譽むべき歟)

(廿一) 反覆は當然

聞田風之助は、人々の怪みなせるに對ひて、一々に仔細を説明かせて『…サア其れだに依つて君等が、纏まつた金に在付とが出来ないので、何に正直が信用の資本だと云つて、サウ正直過ちやア、世の中が渡れるもので無い、其れも相手を見て法を説けて、相手が眞人間で、信實國家の爲に身命を擲つても國利民福を計らうと云ふ、純粹の了簡から出て來た相談ならば、義士の一諾は千鈞よりも重して、幡隨長兵衛を極るも結構だが、マア考へて見玉へ、第一君等に引合つて内閣御味方の相談を約束させたのは、目録辛だらう、彼奴中々の老狸で、油断も隙もある奴じゃア無いぜ(聞田は多少の鑑識を有す)彼奴が口先で國家だの帝國だのと言つて居るのは皆其筋の受賣りで、其心底には國利民福などの觀念は微塵も無く、唯おのれが眼前の私利のみを營むに汲々たる小人俗物(罵得て痛快)それを使用して君等を買込み、議場の多數を得るに苦心し居る内閣だつて、煎じ詰て見る時は、藩閥勢力を維持して、一日でも長く椅子を占て居やうと云ふが目的で、所謂富貴榮達を將て我獨占の有となさんと欲する大賢君子の御揃て無いか(此奴何等の放言ぞ)それを知つ

て居る位なら、其連中に對して義理立をするのは、即ち宋襄の仁、尾生の信と云ふものだ、彼奴等に竭した所が、有りがたいと思はぬのみか、咽元通れば熱さを忘れ狡兎竭て良狗煮らるゝと云ふ目に逢ふのは、知れ切つて居るに由て、此方の都合で變替反覆したとて、何の氣の毒も糸瓜もありやア仕ないよ、反覆するが當然と云ふものだ（説入つて妙々）徳義と云ふ詞は今日の政海では非立憲的の語と成つて居るのを、君等は議場に連なつて居りながら、御存知なしとは迂速千萬だぜ（何等の激語ぞ）……ナニ反旗を掲げ様とすれば、意外の障礙が沸いて来るの恐れがあると、そりやアどう云ふ障礙だね……第一に貸金證書の訴を起されて、去年某が干田齋藏に千圓の訴訟を受けた様な目に會ふが恐しいと云ふのか、ワハ、ハ、ハ夫れ位な事が何て恐しいものか、併し目録が渡した買収金に證書を出して借入金に仕たが、全體君等の過失だけれど、少しも頓着するに及ばずよ、彼奴だつて猿者だ、喧嘩別に成つた所が、決して其證書を以て出訴する氣遣ひなしよ、もし出訴したら、其時こそ其金は是々々々本來の性質、内閣から出た賄賂たると、隠も無い事實で御座ると、裁判所て堂々と買収の事實をぶち撒けて、臭物の蓋を叩いて見せる分の事、そう成つて見玉へ、いくら内閣連中が平氣平左衛門でも、居て溜らぬに山つて、向から誤つて手を下げて示談を申し込んで来るよ、

其時には反對に何程か此方に示談金を取つて遣玉へ、其辯護は僕が一手に引受けるから安心して居たまへ……第二は諸所方々の高利貸か蜂起して責めて來ると……ナセネ……フウ其高利貸は誰々だ、名を云つて見たまへ高利貸なら大抵僕も知つて居るから……ナニ邪極藏——密木紫里太——柿替節郎——松軒印四郎——庭里須亭吉だと、ワハ、ハ、ハそりやア極妙だ、其奴等は皆目録の乾兒だぜ、シテ見りやア君等の借りて居る高歩は目録の手から出て居ると見えるな、宜しい宜しい、それじゃア反旗を揚る日に成つて、目録が君等に向つて違約券に掛つたら、實は是々の借金が有つて責めらるゝのが苦しいに由つて、内閣反對黨に金を借りる爲だと答辭して、彼奴を板挾に掛けてやるリ、其れも僕が請合つて巧く遣つて見せるから、大丈夫に思ひ玉へ……第三は新聞紙が喧ましい、必らず再度の反覆と酷論をするて有らうと、馬鹿ア宣ふな、そりやア内閣機關の御用新聞は、君等の叛色が先方の大不利益に成るから、驚々と吐すだらうが、反對の諸新聞は、無論に君等を觀迎して、好歸と祝し立て、譽契るに由つて、却て世間の評判が好くなる位だ……斯して見れば君等が僕に同意して、叛色を顯はすと仕た處で、百利あつて一害なしと云ふ事は、判然して居るでは無いか……ム、成程、叛色を現はすと仕た所て、駒里君の説は大に一理ありだ、今日の如く餘算が一鴻千里の勢

て通過する機では、大勢已に定まつて、叛旗を掲ぐるの色を見せる機会があるまいとの懸念は、一應その通りだけれど、ナニ／＼機会はマダ／＼大ありだ、勸業銀行―勸工銀行―鐵道―外債―殊には金貨本位の如き郵船補助の如き、頗る重大の事情ありだもの、乗すべきの機会は決して尠からずよ……觀じ去れば一個の大伏魔殿中、慾火燃々として内は燃え、噴出の時正に近きに在りだ、其時を見て突然僕が君等と一團となり、「此一條は何分にも御同意が出来ませぬ止を得ずして反對仕る御座らう」と表面に果狀を附けて恟りさせ内閣の荒肝を抜いて置いて、扱それから調停使が来て散々摩たり揉んだり仕た上で「それ程御困りと有るならば據所ない、お頼みゆる枉て賛成する代り、僕等の注文を聞いてくれるか、其注文と云ふは是々だ」と初めて本音を吹出しての飛車取り玉手、向ふは枝重に掛かつた切なさ、否でも承諾せねば成らぬ場合に成つて来る……そりやア、そうさへ成れば、一舉して五十萬圓の大利益、その配當から収入まで、此通り、見玉へ、すツかりと製て、内約束まで出来て居るよ、エ、君等は一人前が儘に二萬圓づゝに成る仕事……ナシノ、どうして投機は賭博さ、投機の場所が一ヶ所に限た事があるものか……大丈夫磊々落落々、日月と光を争ふべしただ僅ばかりの目腐金で買収され、唯々諾々て居る奴があるものか、斷然僕に同意して、相場所、即ち賭博場増

設の運動に取掛かるとするサ」と相談は遂に一決したりけり。

(廿二) 鐵拳騒動

千尺の堤防も、船虫の穴から崩れたる例もある、知て況や是は時に取つての大事、此確執の一條より、御方の軍勢離散して、議場に敵黨の氣勢を増ましむる事もありては、大臣方の御身の上、中々捨置くべきにあらず、如何はせんと、木挽町なるあせ川の奥座敷に集まりて、秘密の會議に及びたる、其人々は誰々ぞ、先づ官人には骨抜軟良、石無負高、髭野塵鳥、進歩黨員には尾先阿闍梨狐猫、犬神坊猪禪師、茂林寺丹紀、被買の自由黨員には赤井毛唐、槍栗蛇内、赤西吝太衛、開田風之助等とぞ聞えし。扱も事の仔細を尋ぬるに、今度御方の軍勢催促に、關白の松殿を初め率りて、鷹巢大臣、木華大臣の仰せを内々に承はり、陸奥の黄金の花を撒ちらして、汚くも穢らはしくも卑劣の手段を運らし、買収の功を奏し、左しも世間にて喧ましかりける豫算案すら、物の見事に議場を通過させ、大臣方の台慮を安んじ参らせたる、勳功第一の忠臣、内閣の大策士たる目録幸は、狡猾分別人に勝れて賢く、其狡猾奸智は當世獨歩と云はれながらも、戀は思案の外

と、世の諺に云へる如く、色情に關りては、動もすれば失躰の舉動とも多かりけり。されば去年の秋頃よりして、新橋の西王母と異名せられたる某と云へる泥拍子を見染て頻りに言寄り、今は深き中の交となりて、頗るうつゝを抜き、彼女に鼻毛の數々を讀まれ、垂涎三千尺戀に依つて此くの如くに長しと吟みたりけり。然るに此西王母は聞ゆる水性の剛のもの、金にさへ成る事なら、如何なる鬼にも神にも會ふと云ふ一人當千の慾張なりければ、凡そ懷の暖かなる者と見れば、其望に任せて靡かずと云ふ事なし、されば今年の春より被買黨員の一人たる顔野冠者生白と云へる優男と契り合ひて、今は離れ難き中となりて、毎日の様に逢引をなしたりけり、初めの程こそ、女は目録の目を忍び、男は世間の噂を兼ねたりけれ、今は知れなば知れよ立てば立てよと度胸を据て、精駄屋にての會合に、目録それとは知らざれども、満月に赴きて西王母を招く毎に精駄屋の座敷なりとて參る事も遅く、偶々參れば髪びんの毛のほつれさま、尋常ならぬ體に見ゆる事の多ければ目録も扱はと悟りて探り見れば、何ぞ計らん、西王母を我物顔して誇れるは顔野冠者にて、其費途に向けたる金員こそ、我手を経て冠者に渡したる買収代金にてありければ、飼犬に嘯附れたるも同様の不覺、返す返すも遺恨の次第、おのれ詮術こそあれと、怒りを忍びて方略を運らし、或夜冠者と西王母が精駄屋にて忍び

合へん機を見て、目録は突然に押掛けて、西王母の島田番を引掴み、折檻に及びたる而已ならず、是はと障へたる顔野冠者をはったと睨み、奴輩よくも余が生活の花を手折たるよなと、罵りさまに鐵拳を堅めて、冠者が横面三ツ四ツしたかゝに打ちゆがめたりけり、冠者も此狼藉に怒りて、立合はんとせし處を、女將はじめ人々出合ひて引分けたりければ、其場はどうやら鎮まつたれど、冠者も亦是一個の英雄、目録に打たれて争でか泣寝入に濟すべき、此耻辱を雪がずしては、人中に顔出しは成るまじきぞと吼出たり。是を聞いて目録の方人する者もあり、顔野に與力に參る者もありて、其確執は一方ならぬ騒動とは成つたりけり。

骨抜軟良は一座の人々に對ひて「いかに方々、此納りは如何いたしたもので御座らう、今日の勢では、顔野冠者の一類よりも、却て進歩黨の人々が、目録を憎みて、彼者を大臣方の帷幕より断然退、べしとの御請求然るに被買黨の人々に於ては、目録もし退けられなば、我等も袖を列ねて内閣と分離せんとの御申條、どちらがどう成つても、實に内閣の迷惑じゃが、何と諸君、御名案は御座るまいか」と議したれば、一座の面々「されば御座る、全體目録が婦人ゆゑに魔力に訴へたとは、野蠻の極である」「否々、顔野冠者が横盤を切つたるが不徳儀である」「西王母の節操ないのが、今度の亂階と云ふべきもの」「目録は顔野に對して謝罪をせ

まいが『顔野から先詫言を申さねば納まるまいが……』など、小田原評定に時を移したるが、其臍腑に分入りて心底を探れば、先尾大神は先日の談判にて、目録の爲に面の皮を甚に剝れたる怨みの骨髄に徹したれば、此様を以て彼を退けて復讐せんとの底意、また被買黨は顔野冠者一人を犠牲となしても、此場合に目録に恩を賣り、以て内關の歡心を繋ぎ、間合よくば金の蔓に任やうと云ふ内心、恐しななども愚かなり。されども、何方も轉ぶ所は金の沙汰、如何なる理か知れれども、骨抜石無の兩人より、調停案を別席にて槍栗茂林の兩人に談合したる末が、目録顔野は相互に過失を謝して怨みを残さざる事、西王母の行爲は現状の儘に黙許して共有となす事、與力方人は皆これにて満足する事と定まりて、鬚野に持たせたる皮鞭より、取出したる幾束の大札授受したりけりとかや、其れにて事は落着して、翌日からは目録顔野其外が、いづれも皆元の如くに親密の交際とは、洒落と云はん、風流と云はん、イヤ驚き入つたる事共かな。

(廿三) 幣制論

『其んな野暮談は大抵に止して立て、是から夜に掛けて、雪見に出掛けやうで無いか、幸ひ今日が土曜で明日

は日曜、君等だつて、連日の議場で極めて御疲であらう、少しは精神を休めて浩然の氣を養はんじゃア可んよ』と温言以て一座の政治家を慰藉したるは餘人にあらず、即ち目録辛なり。此一座は尾先阿閉梨、大神猪禪師、茂林寺丹紀、赤井毛唐、槍栗蛇内、開田風之助、赤西春太衛の諸人にて、先日精駄屋にて、西王母一條に付て、目録の鐵拳を頂戴したる顔野生白も同席に列つたるが、其れは目録、この顔野にいつまでも心に恨みを遣させ置ては、後日の爲に宜しからずと覺つたれば、勉めて懇篤に持成て、其心を慰むる様に立廻つたり。會合の場所は、木挽町のあせ川にて『モウお船の支度も、何もかも、宜しう御座います』と女將の報知に、『さらば参ると仕らう』と主人の目録が先に立つて案内なし、沙留の河岸に縊ひしたる大家根船に乗込んで、左様なら往つていらつしやいませ、御機嫌よう、船頭さん、お氣をお附申しておくれ』の送り詞を後になし、内川を経て程なく船は大川にぞ出たりける。船中には定めて新橋の泥拍子等、多人數乗込みて居るならん、何れも内々心に期し、雪見より面見、面見よりも肌見、肌見よりも花見の方こそと豫期にしたりけるに、こは如何に、船中一人の雛妓だに居らざるばかりかは、肝腎の花見の牌箱も、用意してあらざりけり。餘りの事にと一座の中には、此精進潔齋こそ殺風

景なれ、没風流なれと議する者もありければ、目録は微笑して「サア諸公は素より天下の豪傑、磊々落落、敢て細節に拘はらざる御性質だに由つて、船中に校書が居やうが、ぼたくと牌の音が仕やうが、お構は有るまいが、御大喪後まだ何日にも相成らず、其上に諸公の一舉手一投足は、天下の瞻望する所だから、マア今日の處は是で御容赦に與り度い、尤も向島に参つたら、また趣向の附方もあらうては無いが、其積りて先一盞傾け給へ」と取出したるは櫻田麥酒に越詰正宗、二三品の下物、頗る簡潔を極めたり、簡潔は至極結構に違ひは無いが、贈賄の簡潔と、御馳走の簡潔だけは、有りがたく無い仕合せだと、一座は各々不満ながら、元が雪見の案内なれば、今更理屈も言へず、せう事なしにケビリくと酒を飲みながら「ア、好景色だ、實に一面の銀世界だ」カウ銀が多くつては、金が騰貴して、金一銀三十二と云ふ釣合にも成るだらう「ア、是が本統の銀だつたら面白からうに……」など、雪景を賞は賞ても、元來雅趣詩情などと云ふものは、聊か其胸中に貯蓄なければ、雪の白きを見れば肌膚が栗立つとの感覺を起すより外は無し、扱こそ談話の問題は議院の功名自慢に起りて、遂に流行の幣制問題に移りて、目録が思ふ坪にぞ入つたりける。

「……此事に付ては、僕敢て首相の徳を稱賛するでは無いが、現在倫敦にて請取つたる償金が金貨であるのを

利用して、我日本でも幣制を断然と改革して、金本位にすると云ふ英断は、飽くまでも雙手を揚げて賛成するよ「イヤそう一概に金本位にばかり傾いては困るて無いが、勿論僕ところの大將も、金本位は明治四年遣幣寮開設の時よりしての宿論ゆゑ、同意は知れ切つて居るが、抑々此問題は實に我國經濟上の大關係だに由つて、利害得失を十分に研究した上で無ければ、議決は採られまいぞ」否々、そりやア可ないよ、金銀の論は世界各國已に定論ありて、金本位は最早動かす可からざるの正説と成つて居るもの、日本ばかりが因循して居ては、前途將來大變に損てはありませんか「然り、堂々たる日本帝國が、支那印度と同じ様に、銀貨國たるに甘んじ、座して歐米金貨國の爲に擔従せらるゝと云ふのは、實に殘念至極「併し御同様に其銀貨で擔従せられて居るじゃア無いが、然も今日の主人公たる目録君が仲買を仕て、買収したので「是さく眞目な話の中に、駄洒落の雑ツ返しは御免を蒙らうぜ、所て其買収の銀貨では「其銀貨はモウ疾に費つて盡つたらう「エ、君たちが餘計な事を言ふから釣込まれたアね「釣込まれたら、もそつと銀貨の餌を貰はうじゃア無いが「銀貨で無くつても紙幣で宜い「なんなら、目録君の約束手形でも宜しい「此で直に渡すなら、僕は思ひ切つて二割引くぜ「此方は三割までの割引で承知するぞ「オット半金でも、即金なら我慢する

が「ア、喧しいネ、オイ目録會長、僕の演説中は他人の發言を禁じてくれ玉へ」それよりやア、御當人の演説を撤回する方がよいぜ……と驚々たる雑話に、金銀おの／＼本位を争ひ、船中は宛然たる一輻の經濟學生の討論會の觀を成したりけり。

目録は初めて口を開きて「サア其金銀の可否得失は、諸公の名論卓説、一々に感服し奉る、中々僕如き素町人が喉を容るべき所で無い、併し此問題に付て、僕は諸公の力を借りたい事がある、尤も成功の上は利益を分つ事に約束をして、手附の金も直に渡すが、どうか御同意を願ひたい……その趣意と云ふのは斯だ」と膝を進むれば、一座も利益と聞いては皆耳を傾けたり。

(廿四) 船中の密議

目録辛は徐に説出して云く「唯今も申した通り、諸君が金銀兩貨の本位如何に付て其利害得失を御論じなされたる趣意は、雙方とも各々至當の道理ありて、僕も謹聴いたして頗る敬服仕るが、併し、僕の見る所を以てすれば、此問題に就て、諸君が其様に眞赤に成つて、眞目で議論をなさるのが、太だ迂遠極まると思ひま

すネ、先づ考へて御覽なさい、貿易の勘定尻の差引で、歐米から日本に仕拂ふべき金額が多くなれば、日本は銀本位で居ても宜しいと思つても、自から、金本位が行はれる様な好都合に成るだらうし、其れに反對で、歐米へ仕拂ふべき勘定尻が年々嵩んで來た日には、金本位でも其金が外國へ流出する譯合ではありませんか輸出入の差引は日本の損に成つても、金貨は逆に回つて日本へ流れ込むと云ふ様な手づまは、逆も出来る事では無いと思ひますネ……勿論、關白松殿でも猪熊殿でも、其邊の事は百も御承知だ……サア百も御承知で御座りながら、此問題が持上がつて來たのは、例の公債が金本位に仕たならば、外國でも引請者があるだらうと云ふ所謂外國債で經費の不足を償ひ以て一時の遺繰を附けやうとの迷ひの夢、いま一ツは此節の不景氣で、世間が彼是と兩殿がたを非難するに由つて、此金本位説を斷行して、人氣を取らうと云ふ當座の工夫、この二ツで成立した金本位説、是だから僕は金本位説と名づけて、金本位問題とは名づけ無いワ……所を世間の阿房等が、此迷ひの夢や當座の人氣取りをば眞に受けて、サア是から日本が金貨國に成つて、我々の懐中には、山吹色の黄金貨幣がチャラ／＼とは入つて來ると悦び出し、銀から金に早替でもする様に騒ぎ立つて終には眼光千里の遠きに達する程の諸君までが、其の烟りに捲込まれて、頻りに貴重の腦漿を膾まし、學理

學説を擔ぎ出したり、經驗實歴を證據に取つて、此を先途と議論をなさるのは、抑々何の爲で御座るな、僕に言はせると、失敬ながら、是ほど徒勞はありませんぞ、是だから、今日では松殿も猪熊殿も、人氣取りの金本位説が、餘まり世間の素人受が仕て、ヤア／＼言はれるので、其實は騎虎の勢ひに成つて頗る當惑、今さら引くには引かれず、内々は困つて御座る様だ：：ナニ、僕だつて兩公の口からして、乃公困つて居るよと云ふお詞を、親しく拜聴は仕らぬが、自から語氣の中に現はれるに由つて、ハ、アと勘付たのサ、其れ位の事が見え無くては、策士商賈は出来やア仕ないよ：：右に付き、第一僕が諸君の爲に謀るには、此金本位説の利害得失を、左ほど眞剣にならずに、好加減にごちやまかして内閣の注文次第、議場の決議次第に任せて置いて、宜しくお茶を濁すに若は無してあります：：其れからして第二が、僕に取つても、諸君に取つても緊要なる重大問題じゃ、凡そ大きな金儲をするには、時機に投ぜねば出来ぬもの、歐米諸國の富豪が、一代に身證を仕上げたのは、皆巧く時機に投じて運動した故であらう、其で今日この金本位説で、世間がそる／＼まご附きか／＼つて來た所が、即ち屈竟の時機と云ふもの、此時機を徒らに雲烟過眼で眺めて過すのは國土の費で、所謂天の與ふる所を取らざるも同前、御同様に心を合せて運動の掛引をすれば、大金手に唾し

て得らるべしでありますぞ：：勿論々々、實地の掛引は僕が一人です、其資本の用意も、既に僕が胸中に成竹ありだから、少しも諸君の御心配を煩すには及びません：：其で第一には、御同様の頭の中では、此金本位説は迷ひの夢だ當座の人氣取だと合點して、たとひ誰殿が何と仰せられ様とも、決して反對の銀本位説を主張せざる事、第二には、表面上は飽くまでも殿方の御寢言を眞面に受けて、成程閣下の御高説は御尤千萬、間然する所無して御座りますると感服して、お指揮次第に大鼓を叩く事、第三には、其大鼓の叩き加減を計つて、僕が諸會社鐵道の株券をば、或時は買ひ或時は賣つて、掛引をするに依つて、諸君は其實、僕の注文に従つて説を吐くに緩急を玉ふ事と極めて置かねば成らぬ、其時に成つては、少々位は松殿や猪熊殿の思召に戻つても、金に成る仕事だもの、知らぬ顔して遣り玉はねば相成らぬと云ふ事は、兼て御承知で御居てなさいじゃ、是を要するに、其發表前に逸早くも金本位説を利用して、御同様が金儲をするのである：：其で、儲かつた金は七三に割つて、僕が七分で、諸君が三分：：どうして／＼四六には割れぬよ、僕が資本を一人て出すのだから、諸君に四分取られて堪るものか：：ナニ歩み合つて六分五厘と三分五厘に仕やうと、大分細に懸合玉ふぜ、宜しい六半三半で折合ふと仕ませうから、諸君も此は十分に巧く遣つて下さり

では可ないぜ……よし、さう極まれば、直に明日でも明後日でも、契約書を取替せて置くに致さう……」と
秘密中の秘密に計畫をなしたる中に、船は三圍を過て植半の河岸にぞ着いたりける。

(廿五) 得意の境界

雪見の一行は、船より上がりて植半の樓上に登りたるに、思ひきや此一行の政治家大先生方の、極て内々に
或は寧ろ公然に寵愛し玉へる、牛込、赤阪、下谷、鯉岸島の校書等は、既に疾より此樓に先着して、諸君の
尊臨今や遅しと待受け參らせて、奉仕頗る懇懃なりければ、諸先生の御顔の締は忽ちに解けて、此は五十九
度迄に釣下り、口は咽の中を見透さるゝ程に明き『どうして来て居た』久しう待つたてあらう』など、慰籍
の御詞を忝くも懸けさせ玉ひて御満悦の林斜ならず『了得は目録君、この可憐兒たちを此へ御廻し置きとは
實に御高配恐れ入つた、此通り先から先へと氣が廻つて、他人の腹をふぐつてお置なさる所は、實に大策士
の開山、大才子の自家』と贊稱の聲囂然たりとは、扱々政治家と云ふ者は手前勝手の者と知られたり。
盃洗まづ出でて、お膳、これに次ぎ、口取、刺身、煮物、お椀、焼魚と、順序を追つて出たる御仕着の料理、

頂戴、お替せ、お問、お重、と獻酬の禮も行はれて後は、耳熱し興酣にして、向島の雪景などは、どこへや
ら消えて去ひ、高談、笑話、四方に起りて、或は議院の勝利を祝し、或は演壇の名辯に誇りて、我劣らじの
自慢話、或は校書を傍に引付けて、前宵の情話の殘餘を語るもあり、或は雛妓の否がるを捕へて、乃公が心
裏の情緒を訴ふるありて、事の昧いよく喧雜となり、長髯の頬に横たはるゝは未だ任せられざるに何の餘
ぞ、放言の空に走るは未だ知らざるに何の蝶ぞ、酩酊墮落して主客を知らず、純然たる無禮講に、各々本性
を露はしての大きはぎ、調子外れの義太夫、洞間聲の新内はものは、隠し藝のてるれんに至るまで、此を
前途と擔ぎ出して、更に紳士の氣風なき所が、即ち諸先生得意の平民主義なる歟。
此方にては或先生が、寵愛の雛妓に踊らせて、垂涎三尺の御愉快『ム、巧いぞ』、艶容掬すべしである
ぞ』との響聲に、踊つたるは舌出三番叟。
『さて魂膽の口止は、案を査定の日をみらみ、贈る賄賂は何々やるな、革の靴に許多のお札、紙に包んで水
引に、數も丁度のきたなさや』さまはナア百圓ナア、エ、わしや九十九圓ナア、エ』ともにナ議會のナア
、エ、はつるまでナア、エ……

彼方では或先生の向ふに座つたる白拍子が、名古屋訛の清元、しかも調子が外れて、三味線の甲坪も少々宜しからざるを、委細構はず呑気に弾て、語り出したるは保名の淨瑠璃。

「……あれあれ否やらしい、大經綸の胡化威し、土人形の木偶の坊、高子の纏頭や遣る事も、知つた顔せざ口きかず「詮議もせれば嘘らしう、アラ切なさの腹の中「主は忘れて御座んせう、しかも去年の内談に極た卑劣の謀叛から、騒ぎの後は一日も、螺を吹かねば氣も濟まず、ぬらりくらりと世を渡り、瘦細るほど働いて、ヤツと届いた嬉しさに、役割きめて當る日は、いつよりもつい待遠く、ヨイ使ふ使はぬ意見さへ「策士狐につまゝれて、いつそまばつて買収ば、直の出るまでもそれなりに……」

此方の角では或先生の獨吟の謠曲、先生自作の陸辨慶（船辨慶の替唄）

「抑も是は變無政黨稀代の黨員ないらの友無理同隸なり、あらめづらしや、いかに牛連、思ひも寄らぬ振舞の、酒を便りに誘ひの、友無理が沈みし其有様に、又牛連をも仲間沈めんと、いふ儘に、浮べる辯口鏡舌たて、櫻松の紋あたり構はず唾を散らし、毒風を吹掛け、眼もくらみ心も亂れて、前後を忘る計りなり、その時牛連少しも騒がず、く、鉛筆拔持ち相手の敵に、向ふが如く、議論を書せて戦ひ玉へば、

辨慶押隔て、空論業にて敵ふまじと、紙幣さらくくと出し掛けて、當分降参せ、なんぼう遣ませう、算用大お徳、此方これだけ遣り申さう、注文大勝不動妙法の策士に掛けて、からめからまれ反對忽ち鎮まれば辨慶策士に力を合せ、お札を渡して此方へ招けば、猶黨員は慕ひ來るを、引張りこみ手なづけて、又引手管にゆられ駈き、く、跡國賊とぞなりける。

エ、君等は縁起でも無い文句を唄つて、我黨の勇氣を自ら挫くじや無いか、夫れよりヤアまだ時刻も早いから一合戦催してはどうだい、……ナニ兵糧があるかと、失敬宣ふな、コレ見たまへ此通り準備して居るよ、但し諸君の約束手形は不渡だから御免を蒙るぜ……オヤ○君も居ないね……ヤア○君も姿は見え無くなつた、コリヤ妙だ、此の家は怪物屋敷ではあるまいに、皆が居なく成つたは怪からぬ……ハ、ア隠れん坊を仕たのだなア、扱々素捷ツこい事だ、實に敏捷極まるぜ、イヤ是て無、……は危ない橋は渡れまいて……

(廿六) 目録諫言

議院の操縦は、思ふ通り十分に行はれて、政府案は實に一鴻千里の勢ひを以て下院を通過したり、上院素よ

り是れ與し易きのみ、既に陸には平壤を陥れ、海には黄海を占めたる大勝利、遼東奉天正に我有となる、北京を圍みて城下の盟を成さしむるの目、近きに在りと云はん計りの擬勢にて、諸公の得意將に頂上に達せんとす。(是を中世の軍物語體の文にて書さん)今日しも此操縦に任じ玉へる兵部卿の殿の御前に伺候したるは、大策士の目録辛なり。卿の殿は御氣色最も麗はしく、鷹揚に机にもたれ満々と湛へたる麥酒の盃を取上げて、一息に飲干たまひて、『如何に目録、など心の儘には飲まざるぞ、議院閉場の上は、改めて大饗をも設け行ひ、祝盃を揚んずるが、今日は世に云ふ前祝の一盃、なに心置のあるべきや、例の手並は鷹友よう知つたるぞや、續さまに二三本傾け候へ』と自から手づから酌取らせて、目録に酒賜ばせ玉ひて、『扱も目録、和殿は此儀いかゞ思ふぞ、抑々松殿内覽の宣旨を蒙らせて、關白にならせたる初めより、諸大臣が陳座の内議に於て、思ひを惱したるは、議院の事にてはありしぞ、松殿には此儀尤も大切なりとあつて、猪熊の大臣を深く頼み思召し、熊進大僧正を語りひ、叡山三塔の其一たる進歩塔の大衆の力を假りて、議院の詮議、御方の勝利たらん様にと謀られしかども、彼進歩塔は思ふにも似ぬ小勢なれば、逆も他の二塔に對して打勝へうなかりければ、此鷹友こそ和殿に謀りて、一山諸塔の大衆ばらを買收こと、は仕たんなれ、されば其計略

十分に事行はれて、今度の大勝利、これ鷹友が手柄にあらず、全く和殿が買收の功名、勳功一ツにあらず、勳賞是重かるべしと、松殿へも執奏して、已に其内議にも及びたるぞ、其れに付けても、和殿には朝廷の官人殿上人にならんずる望にてもあらば、其儀敢て達せざるにあらず、但し兼ねて申請はるゝ如く、總裁職にて満足なるや、如何に』と問はせ玉ひけり。

目録あまりの忝なきに、首を低て平蛛の様に平伏して申しけるは『御誕まことに忝う候ふ、今度の御勝利こそ、我殿の御軍略、唐土の張良孔明にも勝れ、我朝の義經正成にも超させたる妙智神算の致せる所にて候へ此辛ごときは、殿の御指揮に従ひ奉つて一方の働きを承はつたるばかりで候ふ、然るを其勤勞を思召され、宿願の如く、總裁の仰せを下し賜はらんには、辛が大慶此上や候ふべき、但し補任昇殿の御事は、此身に取つて此上も無き面目には候へども、惣ひ辛ごとき者が、公卿の座に立交り候ふも、官人の嫉み世間の譏とも相成つて、其上に此度の如き目録しき働きも、自から出来難う候ふべき歟、是れ辭退申上げ奉る所なり、次には今度の御勝利、御目出度の限りに候へども、大勢已に定まりたりとは申す條、いまだ御枕を高くし玉ふべき時とは存じ奉り候はず、此上の御計廻こそ猶更以て肝要にて候へ、此儀殿には如何に思召させ玉ふに

や』と問ひ奉りければ、卿の殿は稍々不思議の御氣色にて『こは思はざる詞を聞くもの哉、御方の勝利斯も十分なる上は、今更何をか怖れ申すべき、松殿は申すに及ばず、此鷹友が枕を高くして眠り、榮華の夢を結ばんと、今日以降にては候はぬか』と宣ひけり。目録は首を打振りて『否々決して左様にては候はず、去年藤關白殿が罷させ玉ひしと、其元は我殿の思召立を左迄の事とは心付かずして御座しける故にては候はずや、殿鑑遠からずとは此事にて候ふなり、況や今日は松殿はじめ我殿、木華殿の御代と成つて、世の中も靜謐の様には見ゆれども、且は藤殿の身うち、且は自由國民二塔の大衆、眼を配りて時節を窺ひ、再度の旗上げ仕らんと、弓弧しめし馬の腹帯を締め、すはと云はゞ打立たんずる景色どもにて候へば、中々御油断あるべき時節にては候はず、諺にも申し候はずや。油断大敵、勝て兜の緒を締めよと。其古へ平相國入道が源氏を打平けて、一天四海を我物となし、二十餘年の榮華に誇つて、驕を極めさせ玉ひしも、治承の合戦より世は亂れ初めて、さしも時めき玉ひし平家の御一門は、壽永の春の夕嵐に、花も梢も吹散らされて、西海の浪の底の藻屑とならせ玉ひしと、よも知るし召されぬにては候ふまじ、然るを今我殿の御口より斯る仰せを承はり候ふには、御代もはや末に相成つたるかと思へば、心細く覺え候ふ』と醒々と泣きつゝ、墨紙を取出

して顔にあて、落來る涙を拭ひたりければ、卿の殿も『こは如何に如何にや如何に』とあきれさせて見え玉へり。

(廿七) 内閣萬歲策

目録辛は更に屈する色も無く、主人の殿に對ひ、且つ論じ且つ難じて曰く『斯様に閣下の顔を犯して論じ出しまする上は、此の儀に付て此目録辛が假令御不興を蒙りませうとも、心底包まず申し上げねば、平素の御高誼に對して相濟まぬと存じまするに由つて、憚りなく鄙見を陳述仕ります、唯今仰せられたる如く、閣下を初め松殿木華殿が、先今度の買収で、當年の議會だけを巧く撰縦して置いて、其上で徐々と來年の計畫を立て、反對黨の氣を和らぐる様に、八方美人を遣つて見やうかなど云ふ、弱い思召で御座りますなら、何も此辛は最初ツから此通りに盡力は致しません、一年の計は元朝に曆を閱するの時に在りと申すではありませんか、矧て況や、廟堂の上に立つて、苟も百年の長計を立てると云ふのに、當座凌ぎの一寸遁れは、實に西國男兒の恥と申さねば成りませぬ、恐れながら閣下等の御了簡は、三十年前と今日とはゴロリと變つて

其頃の關東者の様にお成りなすつて御座るかと思はれます（先づ罵て激せしむる所、これ日輪の得意手段）三ツ子の魂は百まで、御座ります、是が非でも唯今の御方針を、飽くまでも、前途にお貫きなされる外に、恐らく上策は有るまい歟と存じます、何と云つて御覽じろ、兼々僕が申し上ぐる通り、貧乏政治家赤貧議員等が、立憲政治は責任内閣にあり、責任内閣は政黨内閣たらざる可からずと、沙羅臭くも西洋政治論の精神を擔ぎ出して、喋々しまするけれど、今や我日本帝國は世界を相手にして眉を比べ、負けず劣らずの一大強國と成る場合に臨んで居る大事の關所、こゝを通過するには内閣諸公が非常の英斷を以て政治を行ひなさらねば軍備擴張も、財政整理も、公債募集も、工業獎勵も、物産増殖も、何も彼も、逆も成功を見る譯には参りません（此言大に理あり）然るに此大任を引受けて、見事に成功させ様と云ふ政治家が閣下等を除いて、外に誰が居ります乎（主人公欣然たり）僕が年來閣下等の御愛顧を受けて居るから申すのではありません、假令閣下等の讐敵であると假定しても、日本帝國の爲に平意虚心で考ふれば、閣下等の外には適當の内閣員は決して無いと、明言するを憚りませぬ（説得て妙）それで世間が、藩閥内閣だの、非立憲だのと、生利に非難し様とも、何も少しも恐るゝ所は御座りませぬ、現に藩閥攻撃を看板にして居る族が、其實は藩閥に依頼

して、息を繋いで居るではありませんか（此實なきにしもあらず）して見れば彼奴等が驚々するのは、蛙鳴雀噪で、毫も氣に掛ける所は無い（此説も亦自から一理あり）また新聞の論説の如きは、元是書生上りの小二才等が書立つて、彼是と内閣に難辯を付けて、一枚でも多く其新聞を賣らうと云ふ爲の所業、何のそれが輿論も糸瓜もありまするものか、新聞征伐は譯も無い事、此上にも内證で反對新聞社の重立た奴を談じ込み補助の金を遣つて味方に付け、夫れで言ふ事を聞かねば、びし／＼と發行停止を喰はせ、恩威並び行はれさへすれば、此目輪辛一人の才覺で、日本國中の新聞を皆閣下等の御味方にして御覽に入れまするに由つて、少しも御案じは御座りません、それにつけても閣下等が今以て少數の進歩黨に心を置き、今も今とて、猪熊公が買収の事を良ないと云つたと、氣掛かりの様に仰せられたが、僕には、其お氣掛かりが、一回合點参りません、高の知れた少數の進歩黨、何の怖い事がありますものか、閣下等の御計畫に異議があるなら、勝手に異議を言はせるとして、繼然手を切つてお仕舞なさいまし、少しも懸念する所は御座りません、内閣に降伏して百事御指圖次第に忠勤を勵むとあらば、應分の褒美を遣かはさうが、提攜だの、協議だのと申す事は唯今と相成つては聞き届けがたしと、却下なさる時には、彼奴等が益々懼伏して首を下げて盲従するは火を

見るよりも明かなりて御座ります、其れとも躍起と成つて、内閣と乖離した所が、彼奴等も過半は骨無し喰無しの五月鯉、金に飢えた肉無し餓鬼、現金で買収ば、何人でも直にお味方、水を呑み生芋を嚙つても、主義を固持して猪熊公へ忠節を盡くさうと云ふ連中は、極めて僅の人数で御座ります。右に付き、猪熊公も勿論伴食のお仲間にしてお置きなすつて構ふ事がありますものか、其れが不平で辭するとあらば、御勝手次第と跳附て、内閣を退かせるが宜いではありませんか。板伯素より恐るゝに足らず、藤侯だつて、山侯井伯だつて、此方から今更手を出して引入るゝ程の緊要が何所に御座ります、薩長聯合内閣の思ふ様で無い事は、二十年間の経験で閣下等は十分に御承知であるのに、其れを再び行はうとは、失敬ながら餘り智恵の無い腰拔沙汰と申すもので御座ります。現に自由黨は物の見事に潰烈したてでありませう、進歩黨も國民も是からまた、此方の思ふ如く分裂させて畢へば、議院に於ける政黨は皆三四十名位に止まるの小政黨ばかりに成る、其れを黄金物の光りて操縦して、内閣のお味方に附置き、議院には常に百七八十の頭を並べさせて置けば、内閣は何時でも多数で、一から十まで御意次第に成ると今日の通り、然るを今また閣外の異論に會つて、他の意見を容やうとは、實に弱々しい御心底で御座ります、其上に猪熊殿は思ひの外に温順くて、

怖い所は些とも無いと、御安心して御居てなさるが、老猫花下の睡は、油断を見せて居ると云ふ事を、御存知で御座りませぬか、今に恐しい目に逢つて、飼犬に手を噛れる様な事がありませうぞ。(利害を並べて論ずる所、鑿々として神に入るが如し)。要するに、政黨恐るゝに足らず、輿論怖がるに足らず、閣外の元勳憚るに足らずと御分別を御定なさるが肝腎肝要、それで無ければ閣下等の内閣萬歳とは申されませぬ」と王荆公流の説を立てたる大策士、蘇張の辯を振つて、建瓶の水を瀉するが如くに説きたりければ、主入公は大に諾き玉ひけり。

(廿八) 反擊脅迫

日曜日の朝まだきに、甲乙丙丁戊己と六人の變節議員、辻車の合乗三輛にてガラ／＼と打連れて音信たるは目録辛が玄關先、頼む／＼と案内して面會をぞ申し入れたる、目録辛、此日は兼て新橋の西王母に内約して午前より船を乗出し、龜井戸に赴きて觀梅せんとの愉快筋あれば、九時までに緊急の用向を處理せんと、繁忙を極めたる所に、揃ひも揃つて雜兵連中の來訪、又無心に來をつたか、エ、煩さしと思へども、是も買

收御用操縦公務の片ツ端なれば、門前拂も成し難しと思ひ返して、表座敷の西洋間へ通し、濫々ながら面會に及びたり。寒暄の挨拶も畢らぬ中に、過日猪熊公の黙り召され控へ召されの失言一件、我々が物の見事に反對の奴原をへこませて遣つたとの自慢話、それに打續いて『扱我々の斯顔を揃へて參つたは外の儀でも無い、兼て開田風之助君から、尊公へ御内談を遂置いたる一條に付き、此程骨抜を以て松殿へ迫つた所が、松殿の御内意には、乃公は別に異存も無いが、鷹巢木華の兩人が折合はぬに由つて、願意聞届くる事は致し悪い』との事、そこで石無を以て鷹華の兩公へ紹介して貰つたれば「此事は目録が類に不承知を言張つて、若し是を許可された日には、經濟社會の融通を紊亂するの恐れがあると、實驗上の事例を援て切に忠告した故に、乃公も其説を大に尤と存じて同意いたさぬじや」との御引導。シテ見れば我等が開田風之助氏と連合の請願一件は、全く尊公の爲に妨害せられて、折角苦心の計畫も水泡に屬すると云ふ次第（是れ廿一回に叙したる密議の一件）尊公に於ては我黨の發企を御存知でありながら、陰に廻つて是を妨るとは、實に驚き入つた成されかた、右に付て、今日は尊公に御面會の上で、尊公には改めて我々の計畫を御賛成あつて、反對説を取消し、願意成就する様に、御盡力下さるか、但しは御盡力下さらぬか、諾否の御決答が承はり度い……

我々も覺悟を極めて進退を定めねば相成らぬ』と嚴めしく張臂して談判を開きたり。

目録は平然として『其儀に付ての御來訪で御座るか、夫れは近頃御苦勞千萬に存じます、其御質問ならば、一々諸君の御了解に成る様に答辯仕らうが、先其一條に就ては、先頃開田君より喉話の様に相談があつた時に、僕は其れは宜く無からうとも言はねば、又宜しからうとも云はずに、宜い加減に曖昧の挨拶で胡麻かして置いた……そりやア其筈さ、改めて僕の意見を聞かうと望まれたでも無ければ、同意を請はれたでも無いに由て、模糊の間に沒了するのは當然の事でありませう、次には鷹巢兩公より其儀に就て可否の如何をお尋ねあつた時に、僕は明かに利害得失を陳べて其不可なるを説き、斯る願意の御許可は宜しく無いと申した、如何にも立派に陳述して兩公の御意見を定させたに相違ありません……其れが何て妨害であります、苟も天下の經綸を以て自ら任ずるの策士が、大臣公の諮問に與つたる時には、心腹を披いて所存の底を申し上げるは至當の事サ、其時に當つて、此目録幸は一點の私心を挟みませぬ、事はなれば仇敵の説も是に賛同し、事非なれば朋友兄弟の論たりとも是を排斥するが、僕の主義とする所である（巧く宣ふぜ）……其主義を枉て持説を變じ、諸君の諸願を賛成し、以て諸君が私利を謀るの手傳を致す事は出来ません、僕が平素の節義が是

を許しませぬ（宛然たる志士の語氣活用し得て妙々）……ム、然らば諸君は開田君に雷同して、自ら決する處があると仰しやるか、どう決し玉ふ御覺悟で御座るな……へー再び節を變じて現内閣に背くの覺悟だと、ソリヤ何様とも諸君の御勝手次第、大丈夫たる者が國民に選舉せられて、貴重なる代議士の地位に當り、其意見内閣と相合して是と提携すると、天下に聲言して置きながら、一旦私利私欲を達する事が出来ない故に、内閣を怨んで本來の節操を敗り、國民民福を顧ずして反對に立つと云ふ事が、汝心に於て安きか、汝安くば則ち之を爲すであります……ナンノ現内閣は非立憲を以て鞏固なる内閣、假ひ外國に向つては存外の軟弱であらうとも、國內に對しては強硬なる内閣で、議員に於ては買収を以て大多數を占領するの内閣である、諸君の十人や廿人の去就に由りて、聊か以て輕重する所はありません……そ、はどうとも諸君の思召し次第、この辛はお勧めも申さねば、お止めも申さぬが、併し僕も其時になれば、僕一分の了見があるから、其段は兼てお断り申し置きますぞ、其場合に成つて、目録は酷ひ漢だとお恨み下さるな、恩讐分明とは支那の格言齒に報ゆるに齒を以てし劍に報ゆるに劍を以てするとは歐洲中世に行はれたる俠士の本分とお考へ置きを願ひ度い（何等の殺氣ぞ）……勿論々々郡樞藏、密木柴里太、柿替踊郎、松軒印四郎等は、如何にも皆僕の

金を借りて資本となし、以て高利貸を致して居る輩であります、さすれば僕の勢力が此輩に及ぶのは、何の不思儀も妙も無いと、僕だつて所有の財産をば適當の方法を以て増殖するのは當然の事であり、期限が來れば僕が彼等に迫る、彼等が諸君に迫るのは、至當の順序と申すもの、併し今日まで未だ諸君の財産を取押へもせずに寛めてあるのは、僕が暗々裏に諸君を救つて居る故と云ふだけは御記憶を願ひ度い（眞綿で咽を締るの語）……ハテ必迫の場合とあるならば、御相談次第では工夫も敢て無きにしもあらずだけれど、乙ウ威脅は諸君可なからうぜ……』と反對せられて六人は背菜に鹽の如く悄然たる計りなり。去れども目録は思ふ仔細のありければ、程よく話を纏め、幾干か買収追加豫算の議を定めたりと見えて、六人は満面に悦の色を帯び、頻りに叩頭して歸りたりければ、目録は送り出して後姿を眺めて『ア、煩さい奴等だ、丸で狗にたかつただに見た様だぜ、併しだにが聞いたら、我等だつてあれ程じやア無いと言ふだらうよそれに彼一條の旨い汁を彼奴等に吸はせて堪るものか……』

(廿九) 橋本樓上

觀梅の歸路は柳島橋本の樓上にて目録幸の一座、新橋の西王母を初めとして、満月の女將、其外泥拍子等七人、これ何れも被買收議員に關係ある連中にて、其實は目録の爲に探偵の役を勤め、被議員等の一舉一動を見るまゝ、聴くまゝ漏さず注進を致す輩なりければ、目録が勞せずして其隱微を前知せるは、此拍子等が力なり。されば今日の御供は旁々其慰勞を兼ねたる者と知られたり。目録は一座に對ひて『今日は皆が、ゆつくりと遊んで、喰ひ度いものを喰つて、仕度とを仕て、遠慮なく藪入をするが良ワ、此中から皆が氣を付けて知らせて呉て大に忝い、そこでこりやア禮と云ふでは無いが、別段の御祝儀なり心付けなりだから、取つて置きなせエ(と皮靴の中より百圓の一束を出して女將に渡して)勲是を宜い様に分けて遣つてくれい』と大氣を見せたる御計に、一座の悦び一方ならず、何れも銘々に有りがたうの禮詞、喧しき迄に聞えたり。目録は打笑ひて『何の禮にも及ばぬ事だが、併し肝腎の様子はどうじや、聞いた事があるであらう』と問へば『さうで御座いますれエ、私やア別に是と云ては聞きませんが、一昨晩鈴木の家で、赤西君が槍栗君と内

證話を仕てお居てなすつた中に、何でも此鐵道は此方の注文通りに届かせなけりやア、都合が悪いが、併し目録に餘ほど株數を渡さにア承知しまいなアと、云つて御座いましたよ『私の方は、アノ骨抜君が石無君と兩人で、目録が例の三公をしつかり攫て居るから、趣向が巧く附かなくつて困ると、あせ川の御座敷で、仰ツしやいましたよ』オヤそう、且那が三光を攫てお居てなさりや、他に四光の出來ッこはありや任せませんよ、それで勝にお成んなさいましたの『アレサ戲談をお言ひで無いよ、花牌の話じやア無いよ、其れから又俱樂部の御連中では、大へん且那の事を悪く言つて居ますよ、本統に憎らしう御座いますよ』イ、エ私しやアあの御連中には餘り出ませんが、何だツて薄氣味の悪い顔觸だから、儘に巧んでる事がある様で御座います『それから又昨日の晩も、精駄屋さんで、猪君と訥狎君の御仲間とが、ヤレ君の猛獸(盲従)が悪いのだあれじやア熊の不利益になるだのと言合つて、動物園の議論見た様でありましたよ』私の方はまた、實業君のお寄合ひで、金と打つて出るだらうか、若し銀が利かなくなつたが最後、我々共は桂馬の高飛で、日歩の餌領に成つて大變だが、此どさくさ紛れに、飛車取王手を掛る工夫は無からうか、此が御同様に將基(商議)を盡すべき所じや無いかと、皆君が心配してお居てなさいましたよ……』と各々内密の報告に、目録は打諾

いて胸の手帳に留めたりけり。『オヤ嬉しい事、それじゃア初めて良の、サア美イ娘(こ)へお居り、桃娘はそこが良よ』オット宮ウ娘の次は御免だよ、不見點々々で出られると困るからねエ』旦那、貴君も一組お附合なさいましよ』おいくら、二十丁、結構……と六人蔭切の一團躰……『困るねエ、又打に廻つたよ』ア良ないよ、さう取られると、胴二に背を喰ひますよ』それ御覽な、卿が勧めたから出たから晒と光一を喰たらうじやア無いか』アレ酷い目に逢つた、此方も此通り、裏がそっくり出来て居るのに、お先を食したのは悔しい、餘程今日は暗剣殺だよ……』と愚痴を云ふもあれば、得意に成るもありて、一面の修羅場、其石一粒を争ひて、いがみ合ふに至りては、戀も色氣も醒るばかりなり』コリヤ旦那恐れ入りましたねエ、立派に出来て居る雨入り四光を、親の素切で打ち分れにおさせなすつた所は、丸で繁蔵が怪猫を一發で仕止めた様なお手際で御座いますねエ』ハ、ハ、繁蔵とは有りがたい、併し此繁蔵は、いつも猫の妖怪に欺かされて、取られて居るのだから幅が利ないよ』オヤ是は御挨拶で御座いますねエ、欺かす所か、此方がいつでも旦那に逢つちやア殺され通して居るのは、ネー姉さん、さうじやア有りませんか』サア旦那と卿じやア、どつちがどうか、私達にやア分らないワ』そりやアお二人の事だから、私達にやア關係なしと仕た所で、旦那此度の歌舞伎は面白いじやアありませんか、寺島の繁蔵は丸で旦那生寫して御座いますよ』さうか、お賤の替を取つて打つた所が、生寫しと云ふのか』と側に居たる西王母の顔を見れば(第廿二回の鐵拳騒動を云ひたるなり)老妓は頼でも無い差合を言ひ出したりと氣が付き』オヤマア、御戲談を仰しやッちやア可けませんよ、繁蔵の氣が利いて居る姿が、旦那に生寫で五分も透ないと云つたので御座いますよ』と塗抹たれども、何と無く其場は白けて見えたりけり。

折りから目録の書生は、急用なりとて、車を飛ばせて馳來りて、差出したる一封を、目録は披見して『ム、承知した、夫れては直に松殿の御邸へ上るに由つて、其積りで骨無君へ電話を掛けてやれ……皆は宜いから寛くり遊んで、九時頃までに満月に歸つて居るが宜いワ、余も十時までには松殿から満月に廻ると仕やうから……ヤレヤレ……忙がしい事だ、策士も是じやア遺瀨が無いネ、併し此状の様子では、あの老狸が……』
『旦那アリア老狸で、老狸じやアありませんよ』と、此方の事だよ……』と、目録は、手紙を袂に引入れながら出行きたり。

(三十) 迷夢一覺

天定まつて人を制するの道理は昔も今も争はれず。目録辛が大策士となりて、左しも見事に買収の功を奏し、議會を操縦して内閣の勝利を一時に現はしたるも、邪ば正に勝たず非は是を厭ふると能はずして、議院閉會後いまだ一年を経ざるに忽ち意外の變相をぞ現はしたる。其仔細如何と尋ねるに、議員の多数は目録辛が手にて、高きは一割で千圓以上、廉きは一打八百圓ぐらゐにて、百七八十個の頭顱を買込み、内閣盲従とは成したけれども、百二三十の殘餘の議員は、少數と云ふてう何れも、氣節を賣べる正義の輩にて、自由、進歩、國民の三黨中にて常に錚々の譽を得たる人々、其外黨外に獨立して敢て他人に屈從せざる方方なれば、假令少數にて敗るゝとも、やはか正義の貫通せざる事やあると、更に勇氣を倍して逆流に立つたりければ、全國の輿論は皆この正義に同感を表して、之を助くるの勢とは成れり。其上に買収されて内閣の御味方に加はり盲従御用を相勤めたる議員の選舉區にては、其選出議員の失操不徳を責むるの論各所に起りて、或は委員を出して改悛を忠告し、或は壯士を派して辭職を勸告するなど、大騒動と成つたれば、了得の被買収議員も狼

狽して、智慧の無き者は、病と稱して引籠り、狡猾に長たる者はわざと出来ない相談を内閣に持込んで喧嘩分れの策を運らし、中にも素早き懸引に巧なる者は、俄然再度の變節して反對の旗下に加はり是見よがしに攻撃の鋒先を内閣に向けたりければ、局面全く一變して、久堅の光り長閑けき春の海に、突然と狂瀾怒濤を湧出して、翻天覆地の状況を現はしたりけり。

扱また御恩賞の約束たりける、森林拂下、專賣特許、電氣鐵道、證券會社等も、望手は多く品物は少くて、お鉢は思ふ如くに廻らざりければ、難方にて相互に苦情の種蒔、とつばすつばの鴉合戦、餌食を争ふ、修羅の街、然のみならず、外交官に擧げ地方官に任ずるとの豫約も、いざ補任と云ふ場合に至れば、望者は多し地位は少なし、其所此所からして案外の故障蕃椒、なり損なつたが不平の種で、兄弟喧嘩や内輪騒動、此方ではかたびし、彼方ではこたゝ、地震落雷火事海嘯、一度に起れる如くなりければ、内閣の運命も今はかうよと見えたりけり。

目録辛は、此綱絳策を如何にするぞと、松殿はじめ鷹巢殿や木華殿に質問はれて、居て堪らず、されども目録辛より身を犠牲に供しても、諸公の爲めに盡力すると云ふ忠臣にあらず、畢竟これまで策士と成つて計畫

したるも、其心の底を捜せば、己が私利を營むの助けに仕やう爲ばかり、事敗れたる曉には内閣の存廢我與る所に御座なく候ふ焉と澄し込んで居る積りの所が、此場に成つてさう出来なれば自分の失敗。金貨本位を奇貨となし、經濟社會の紊亂を當込で、株式の賣買を大業に注文なし以て、一攫萬金の獨占と恃んで居たるに、何ぞ計らん、相場は全く目録が豫期の反對に出て、買へば低り賣れば昂るの齟齬直段、日毎の追式夜毎の大損で、身證の有りたけ持つて去れ、其上ならず熊手を以て掻集むる様にして、取込んだる新事業會社の權利株は、十が九つ皆損となりて、残つたは創立委員の反古請取證ばかり、成立したる諸會社の拂込は、其機類りに迫つて、どうするかとの催促、延滞日歩でも凌ぎ切れぬ場合、それは兎も角も、抵當諸株の不足に向ひ、入金するか、増抵當を差入るゝ歟と、銀行は一徹の懸合、否と云へば直に處分と退引させぬ釘繰り。また其上にも怖しいは、當なして出したる數百通の約束手形、仕拂の期限は、今日か今日かと毎日の取付、一通ても不渡にして拒證書を附けたが最期、それこそ忽ち破産の宣告、田舎漢を欺して、此方の所有と登記したる田地は、訴訟と成つて、控訴院でも此方の敗訴、世襲財産を承知して、貧乏華族に貸した抵當は、法廷の辯論で、どうやら敵手に捲上られさうな模様、外妾は姦夫と俱に出奔なし、侍女はお種を妊みましたと懸

合込み、書生は金を盗んで欠落なし、番頭は引負して影を暗まし、内憂外患交々至り、今は復奈何ともす可からざるの苦難には陥りたり。

されども目録は此難關を喰止んと、我慢に我慢をして平氣なる面をして居たりけるが、少し氣分が悪いに由つて三四日鎌倉に往つて養生して來ると、妻子を引連れて東京を出たりけるに、一週間を経ざる中に、内閣は愈々破裂を生ずると云ふ紛紜、目録はどうした、直に來いと、迎ひの使を立てたれば、四日ほど前に鎌倉を去つたりとの注進、其後は更に音も沙汰も無く、生きたか死んだか、一向に分らず、程經て後に或方へ届きたる郵便端書の文に曰く

小生事都合有之當分の内は此地に寓居罷在候負債處
分之事可然相願候也

明治三十年〇月〇日

臺灣〇〇にて

目録辛改名

夢輪覺足

大策士

扱こそ大策士が秘密の機關は破れたれ。

政買略收大策士終



明治四十四年七月十三日印刷
明治四十四年七月十六日發行

櫻痴集第一卷
實價金壹圓卅錢

編輯者	故福地源一郎
發行者	和野田靜子
印刷者	東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 山下注進雄
印刷所	東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舎第一工場
發行所	東京市日本橋區區田丁目五番地 春陽堂

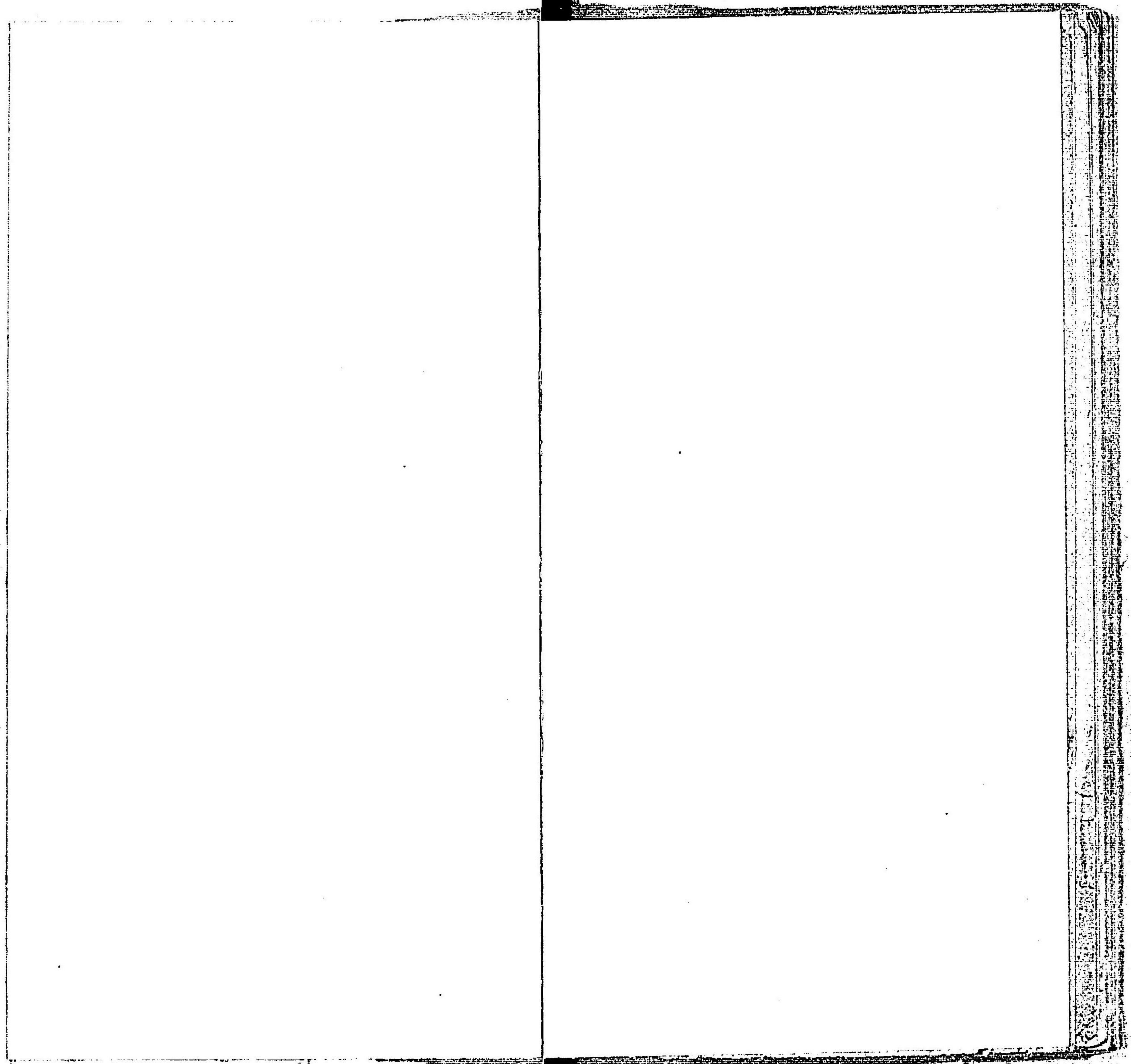
電話本局五十一
振替口座東京一六一七

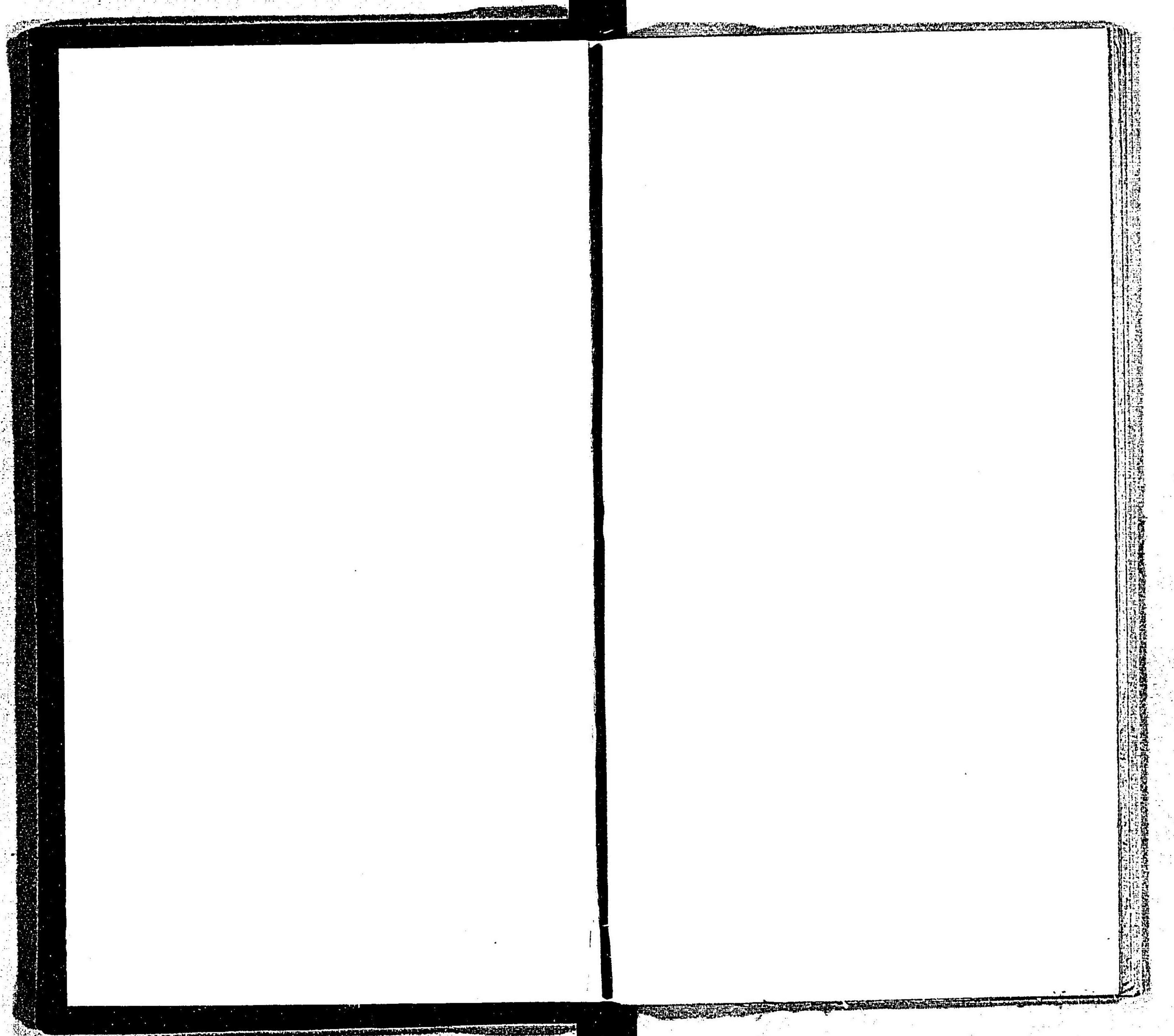
2K-2

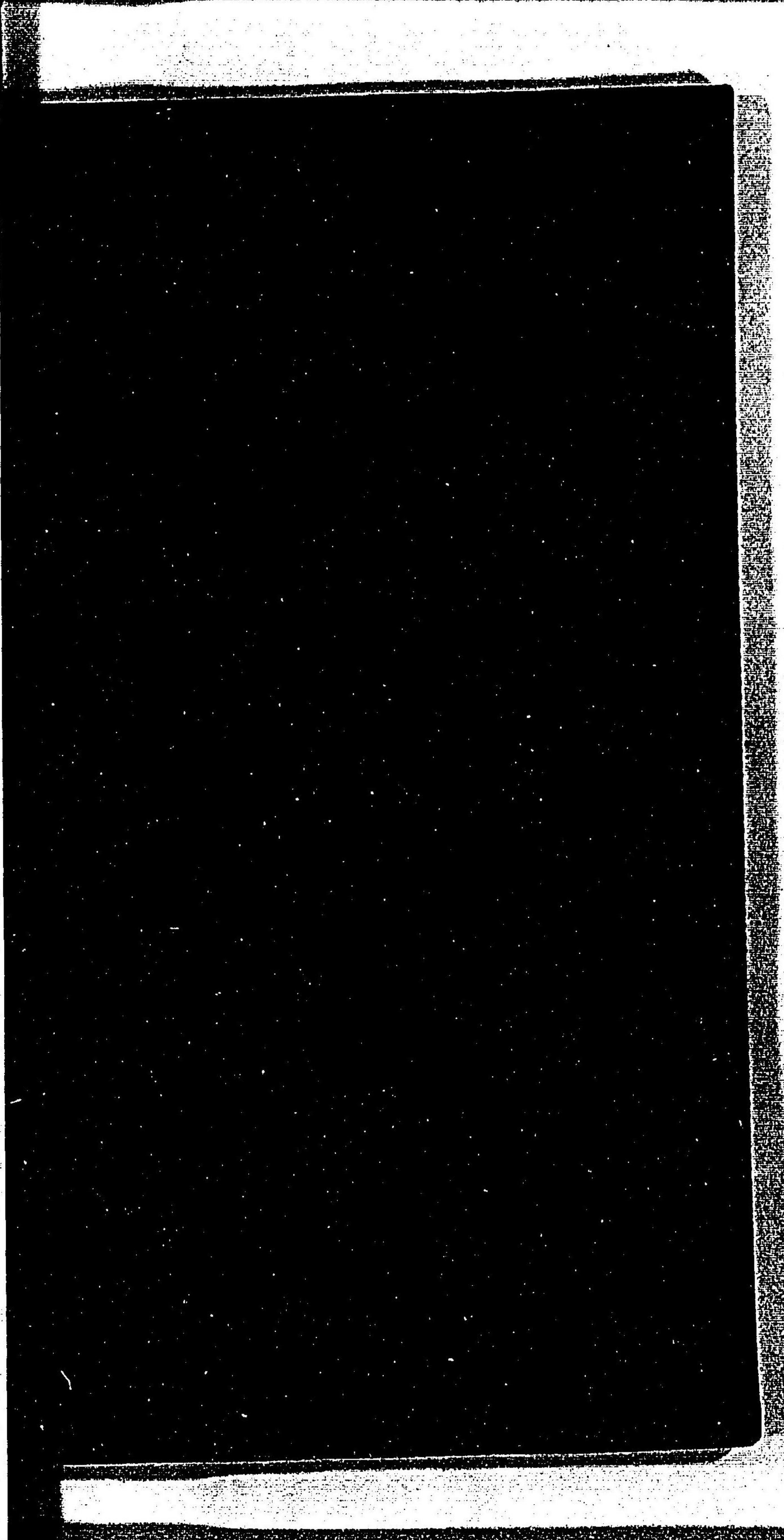
近刊豫告

大貧不知六浮山伏思み	櫻痴集 目第二卷
森平 惠世縣 だ 乏の 歌 魔 ひ 彦 掃 傳 見大 れ 七神 溜 授仙物貳殿 焼	
出雲の阿國	櫻痴集 目第三卷
雙面忠義の鑑	
入鹿御誅戮	
敵討護持院ヶ原	
薄命の花	
もしや草紙	

春陽堂發行







35
242

084858-001-5

35-242

桜痴集

福地 桜痴/著

M44

DBB-0009



